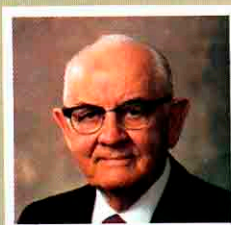


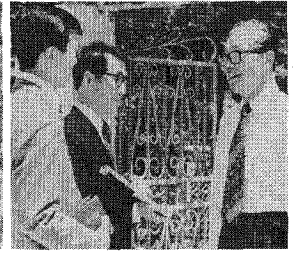
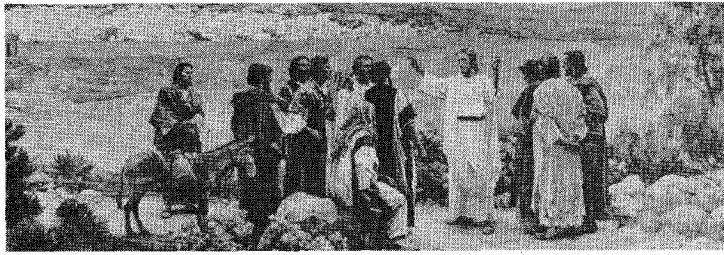
聖徒の道

2 1982

「私たちの受けている福音が
真実であることを証する責任が、
私たち一人一人にあるということです。
これは皆さんの仕事なのです。
天の神が予言者を通じて、
皆さんをこの業に召しておられるのです。
福音を知りバプテスマを受けた
すべての男性、女性、子供たちに
責任があります。」



Spencer W. Kimball
大管長スベンサー・W・キンボール



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ベリ
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシュ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダース
デザイナー：
ロジャー・ギリング
制作：
ノーマン・ブライス

も く じ

われらは貞潔なる.....マリオン・G・ロムニー..... 1
べきことを信す
質疑応答.....リランド・H・ジェントリー..... 4
教会で最も重要な責任.....ロジャー・L・ライス..... 7
「わたしから離れては、
あなたがたは何一つできない」.....マーク・ハート..... 9
天の窓.....ネリ・A・ロジャース.....11
什分の——主の律法.....ルイズ・A・ケリー.....13
実りある結婚生活を築く.....ヒュー・W・ピノック.....14
心に残った6つの話.....トーマス・W・ラダニュー.....22
「クリスチャンだからです」.....アーチャー・M・ブラガー.....28
いとし子ジョニー.....ゴードン・オールレッド.....30
可能性を信じる.....ニール・A・マックスウェル.....38
静かな細い声.....ケント・A・ファーンズワース.....42
キンボール大管長.....スベンサー・W・キンボール.....47
伝道について語る
ひいおじいちゃんの長ぐつ.....ナネット・ラーセン.....54
しゃくとり虫.....ポーラ・デポロ.....58
なにがかくれているかな?.....ミック・リーサー.....61
ローカル・ニュース.....62

聖徒の道 2月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5—10—30
印刷所 株式会社 精興社
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4—9—19
定 価 年間子約2,200円
海外子約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0427 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0—41512
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

われらは 貞潔なるべきことを信ず



第二副管長

マリオン・G・ロムニー

殺人と聖霊を否定することを除いて、不貞は、神の目から見ても最も重い罪である。アルマは息子のコリアントンに教えています。(アルマ39：5 参照) パウロもまたコリント人への第一の手紙の中でこのように説いています。

「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。

もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。」(Iコリント3：16-17)

私には、熱心に求めるべき祝福として、汚

れない徳高い人に約束されている祝福に勝るものはないように思えます。イエスは、いろいろな形の徳に対して与えられる報いを具体的に述べられましたが、心の清い人に対しては最大の報いを約束して下さっているように私には思えます。「彼らは神を見るであろう」(マタイ5：8)とイエスは言っておられます。また彼らは主を見るだけでなく、主のみもとにあって安らぎを得るでしょう。主の約束にはこのようにあるからです。

「絶えず徳を以て汝の^{おおい}想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強く

なり……。」(教義と聖約121:45)

貞節に対する報いと不貞の結果については、ヨセフとダビデの生涯にはっきりと見てとることができます。ヨセフはエジプトで奴隷の身にあったにもかかわらず、大きな誘惑を受けても堅く貞節を守り通しました。そして報いとして、ヤコブの息子たちの中で最高の祝福を受け、イスラエルの中でも特に恵みを与えられた2支族の祖とな

私には、熱心に求めるべき祝福として、汚れない徳高い人に約束されている祝福に勝るものはないように思えます。

りました。多くの人が彼の子孫に数えられることを誇りにしています。

一方、ダビデは主の大きな愛を得ていましたが(事実、彼は神の心になつた人と言われた)、誘惑に負け、不貞を働きました。またその罪は彼をさらに殺人へと走らせたのです。そして、その結果はと言うと、ルシフェルと同様、墮落し、家族も昇栄の機会を失ってしまいました。(教義と聖約132:39参照)

これは昔からそうでしたし、これから先も変わることはありません。応報の律法は厳正なものであり、第7の戒めの「あなたは姦淫してはならない」(出エジプト20:14)を無視すれば必ず罰を受けます。モーセの律法の下では、この戒めを破ると死刑に処せられました。悪に対して寛容な今の世の中では、純潔の律法を破っても罰せられることはありませんが、神の律法の下では、いつの時代にも魂の破滅を招く罪であることに変わりはありません。必然的に霊の死という罰を受けることになるのです。姦淫の罪を犯しながら神の赦しを得ていない人は、神権の召しを全力を尽くして遂行することはできません。J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長がよく話されたように、主は、「姦通と私通を細かく区別」はしておられません。(Conference Report「大会報告」1949年10月, p.194) また、姦通と性的倒錯の間にもそのような区別をしておられないことを付け加えたいと思います。

ある人々の中で純潔という教えは時代遅れであり、男女の乱交やその他の墮落した性的倒錯は許されているし、時には奨励されているときえ聞いていますが、そのようなサタンが用いる詭弁に欺かれてはなりません。そのような考えは悪魔から出たものだからです。

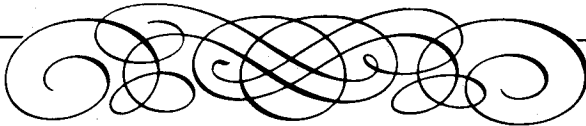
1938年10月の大会説教の中で、クラーク副管長は次のように語っています。「純潔は、私たちの生活にとっても、私たちの文明にとっても重要である。人は不貞を働くようになるかならず滅びる。過去の強大

な国家を滅ぼしたものは、民の不道徳であった。不道徳は現在の強大な国家をも、ちりと化すだろう。……

若人の皆さん、私は皆さんに純潔を守るよう心からお願いする。どうか私の言葉を信じていただきたい。純潔は生そのものよりも重要である。これは私が両親から教えられた教えであるが、真実である。汚れた

まま生きるよりも、純潔を守って死ぬ方がはるかによい。皆さん一人一人の救いはこのことにかかっている。」(Conference Report 「大会報告」1938年10月, pp.137-38)

さて、愛する友人の皆さん、私がこれまで述べてきたことは何も目新しいことではありません。時という試しを乗り越えてきた真実なのです。そのことを証いたします。



ホームティーチャーへの提案

1. 純潔の律法を守ることによって得られる祝福について感じていることを話す。
2. この記事の中に、家族が声を出して読むとよいような聖句や引用があるだろうか。また、この記事とあわせて読んだらよいと思われる聖句がほかにあるだろうか。
3. ロムニー副管長は、「神の律法の下ではいつの時代にも魂の破滅を招く罪であることに変わりはありません。必然的に霊の死という罰

- を受けることになるのです」と言っている。不貞が霊の死（神から断ち切られること）を招く理由について話し合う。また一方で、純潔や徳行が「神の前に強く」なるのはなぜだろうか。
4. いつも純潔の律法に従うために、自分自身をどのように備えることができるのか話し合う。
5. 前もって訪問先の家長と打ち合わせておくと、もっとよい話し合いができるであろう。

教会で最も 重要な責任

ロジャー・L・ライス

聖 餐会の後で監督室に呼ばれて、こう言われたとしましょう。「あなたをワード部で非常に大切な責任に召したいと思えます。それは聖歌隊のために讃美歌を準備するという責任です。」さて、あなたはどのように応えますか。心の中ではこう考えることでしょう。「でも監督、それは大した責任じゃありませんよ。もっと重要でやりがいのある責任、たとえば若い男性の会長とか扶助協会の会長のように、心から奉仕できる責任に召してもらえませんか。」しかしあなたは、与えられた召しを断わってはいけなさと教えられていますから、口元に笑みを浮かべてこう言います。「わかりました、監督。喜んでお引き受けします。」

聖歌隊のために讃美歌を準備する最初の日がやってきました。あなたは30分早く教会に行き、丁寧に讃美歌を並べます。そし

て聖歌隊の練習が終わると、讃美歌を集めて元の棚に戻します。だれもあなたのしたことに気が付きません。あなたの肩に腕を回して、よくやったねとほめてくれる人はひとりもいません。次の週、あなたは少し遅れて行きます。そして大急ぎで責任を果たしました。それでも、あなたに注目する人はいません。

いよいよ3週目です。しかしあなたは行こうとしません。結局、大した責任ではないのですから。

讃美歌を準備する責任は、必ずしも教会で最も難しい責任とは言えないかもしれませんが。教会で最も難しい責任とは、「ただの」という言葉で始まる責任です。「私はただのホームティーチャーですよ」「ただの訪問教師よ」「ただのアッシャーさ」「ただの執事なんだ」と言うような責任がそれです。

では、教会で最も重要な責任とは何でしょうか。それは、喜んで忠実に果たされる責任です。

教会で何らかの役職に就いている人には、3種類のタイプがあると私は考えます。第1に、「はい、喜んでお引き受けします」と言っておきながら、その責任を果たさない人。第2に、責任は果たしても、最小限度のことしかしない人（喜びを感じていない）。第3に、責任を果たすだけでなく、期待される以上のことを行なって喜びを感じている人。

「しかし、讃美歌を準備する責任で、期待される以上のことを行なうには、どうすればいいのですか」と、あなたは疑問に思われるかもしれません。そのことについて考えてみましょう。あなたは傷んでいる讃美歌が数冊あることに気付いて、それを直す時間を取ります。中にはページが抜けているものもあるかもしれません。その場合は、必要な部分を複製して、はさみ込んでおきます。さらに、讃美歌を運ぶ時に落として破損しないように、専用の入れ物を作ります。このように、よりよい奉仕を行なう方法はたくさんあるのです。

ここで、2マイル行く精神で奉仕した教会員の話を紹介しましょう。彼の名前はA・ハロルド・グッドマン、プロボ神殿の神殿長です。彼はアリゾナ州のツーソンに住んでいたことがあります。その時にだれひとりとして会うことのできた人がいないという会員のホームティーチャーに召されました。グッドマン兄弟は何度かその会員の家を訪れましたが、いつも留守でした。隣の人に聞いてみると、毎朝5時半頃仕事へ

出掛けるとのことでした。そこで、翌朝5時に玄関の前に座って待ちました。やがて家の明かりがつくと、さっと立ち上がってドアをノックしました。そして玄関に現われた兄弟に、「おはようございます。私はあなたのホームティーチャーです」と言いました。その兄弟は、自分にそれほど深い関心を示してくれる人がいたのを見て驚きました。それからというもの、ふたりは打ち解けて話し合うようになりました。

ユタ州のオグデンに住んでいる叔母が、若い頃に出会った印象的な日曜学校の教師について話してくれました。その教師は召された時にこう言ったそうです。「日曜学校の教師は教会で最も重要な召しです。」そして、叔母が知るかぎりでも最も優れた教師になったといます。その人の名前は、デビッド・O・マッケイです。

教会で最も重要な責任は、私たちが現在受けている責任だと思います。あなたはまだ特定の責任を受けていないかもしれませんが、私が所属していたあるワード部では、責任の数よりも会員の数の方が多かったために、監督は幾人かの人を監督室に呼んで、日の光栄の会員になって下さいと言いました。つまり、よい模範を示し、必要な人々にフェローシップを行ない、集会に100パーセント出席するという責任を与えたのです。それは神の王国で私たちが受けている召し、あるいは将来受ける召しと同じように、とても重要な責任でした。なぜなら、義に基づく奉仕を行なうことによって、私たちは自らの生活に祝福をもたらし、隣人の生活を豊かにし、神のみ業を推し進めることができるからです。

「わたしから離れては、 あなたがたは何一つできない」

マーク・ハート

1932年、大恐慌は最悪の事態となっていました。実際大学卒業者の内、就職という幸運に恵まれるのは、10人にひとりという状態でしたが、私はその幸運な者のひとりでした。8カ月間の試用期間の給料は1,140ドルでした。私にはそれが何百万ドルにも思え、胸が躍りました。

これは、私が給料というものをもらった

最初の仕事でした。良き両親の模範のお陰で、私には初めから什分の一を完全に納める決心ができていました。実際のところ、ヒーバー・J・グラント大管長の言葉によって、什分の一は何があっても正直に納めなければならないという思いを強くしていたのです。その上、什分の一の算出方法はごく簡単で、小数点を左にひとつずらすだ

「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもってである。」

マラキ 3 : 8

III ニーファイ 24 : 8

けでよいのです。これは、私にも理解できることでした。そして、私は初めての支払い小切手を受け取ると、14ドル25セントを監督の所に持って行きました。それから数カ月の間、私は同じようにして什分の一を納め続けました。そのような折、カリフォルニアで伝道中の兄のミッキーから手紙をもらいました。手紙には、このようなことが書かれていました。「毎朝厚紙を切って、靴の底の破れたところに当てています。こうすれば、ハリウッドのコンクリートの道に足形を残さなくて済みますから。」

私は思いました。「今、自分は什分の一を完全に納めているということで思い上がっている。それなのに、兄のミッキーは靴にも困りながら、外で主のみ業に励んでいる。このままではいけない、もっと現実的にならなければ。」こうして私は、自分で現実的だと思う方法を実行に移しました。まず什分の一を半分にし、7ドルをミッキーに送り、7ドル25セントを主に捧げたのです。

2カ月間、私はこの方法を続けました。けれども、どうも気持ちがすっきりしません。仕方なく、私は監督に助言を求めに行くことにしました。鉱山で働くその監督は、分別のある信頼できる人で、私の良き友人でもありました。「彼ならこの問題の現実的な面を理解してくれるだろう。」私はそう考えていました。

私は監督に自分のしていたことを話しました。少しの沈黙があった後、私は思い切って尋ねました。「監督はどう思いますか。私のしていることは正しいでしょうか。」

「そうですね。」監督は答えました。「あなたは主のお金を大変惜しみなく使ってお

られますね。」それからこう言いました。

「もしお兄さんを援助するのでしたら、主のお金の中からではなく、あなた自身のお金の中から援助すべきだと思います。」私はその返答に驚きましたが、監督の賢明な判断になるほどと思われました。

翌月、支払いを済ませなければならない請求書をすべて合計してみると、6ドル65セント足りませんでした。眠れぬ夜を過ごした後、私は何よりもまず什分の一を最初に納めなければならないと心に決めました。私には、大家さんが不足の6ドル65セントを来月の給料日まで待ってくれるという確信がありました。大家さんはずっと町の外に出掛けていたのですが、戻って来るやいなや、私に事情を説明する間も与えずにこう言いました。「一週間も自炊してもらうことになってしまったので、今月の分は……」そして、私が当然支払わなければならない額よりもちょうど6ドル65セント少ない金額を言ってきたのです。私は、主が私に何かを、つまり、天の窓が開かれるかどうかは私たち自身にかかっているのだと語りかけようとしておられるような気がしました。それまで私はいつも心の中で考えていました。「主は、毎月140ドルという決まった収入しかない人を、経済面でどのように祝福されるというのだろうか。」当時、私にはその答えが分かりませんでした。しかし私は、主が人々をどう祝福されるかは主御自身がお決めになることであり、私のなすべきことは、正直に完全に什分の一を納めることであるという考えに達したのです。

そして今、その後の40年間で振り返ってみると、主が私に注いで下さった数々の祝

福に驚かされます。それらの祝福はどれも私にはもったいないようなものばかりです。心の平安、精神面の幸福、変わらぬ自信、愛する妻と9人の子供たち、家庭、やりがいのある仕事、そのほかお金では買うことのできない数多くの祝福を受けてきました。主が予言者を通して約束されたことは、ま

さしく真実です。「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:10)

天の窓

ネリ・A・ロジャース

私はちょうどブラジルのサンパウロの大学に通い始めた19歳の時に、末日聖徒のふたりの宣教師に会いました。4週間教会について勉強した後、私は強い証を得て、バプテスマを受ける決心をしました。十分の一の律法について学んだ時も、私はすぐにこの原則について証を得ました。けれども私には大きな問題がありました。私は15歳の時から、家計を助け、夜学の費用をかせぐために毎日8時間働かなければなりませんでした。私は月給の半分を家に入れ、あとの半分で自分の衣服や学費、交通費をまかっていました。私の給料はとても安かったのですが、どんなに小さな出費にも神経を使いましたが、月末には手元には一銭のお金も残りませんでした。

家族の中で教会に加わったのは私ひとり、家族のみんなは、私が納める十分の一のために一緒に犠牲を払おうなどとは考え

てくれません。ですから、十分の一を納めようとするならば、私が見える半分の給料の中から10パーセントを出さなければならぬのです。しかし、いろいろな出費をまかなうためにはそのお金全部が必要でした。特に私は大学に通い始めたばかりでした。

私はこの問題について熱烈な祈りを捧げ、繰り返し繰り返し、マラキ書3章10節にある聖句を読みました。「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」この聖句は私に慰めを与えてくれました。そして私は、教会に入ったその日から十分の一を納めようとして決心したのでした。

私が初めて十分の一を納めてから間もなく、雇い主が私のところへ来て、大学へ通

い出したのだからもっと勉強時間とお金が必要だろうと、言いました。そして、他の従業員より1時間半早く帰ってもいいと言ってくれたのです。おまけに、私の給料をその月から50パーセント上げてやろうというのです。

私は何もお願いした覚えがなかったので、自分の耳を疑いました。でも聞き違いでは

ありませんでした。彼が行ってしまった後で、私はマラキ書の中の聖句をもう一度思い出しました。主が約束を果たして下さいなのです。

その時以来、私はいつも必要なものにこと足りています。それは、主が予言者マラキを通して約束されたように、私を祝福して下さいだからなのです。

「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」

(マラキ3:10)



什分の一 — 主の律法

ルイズ・A・ケリー

19 30年代の不景気のさ中、私たち一家はニュージャージーの貧しい農場に住んでいました。土地はやせ、収穫もわずかでした。イチゴだけが、私たちの努力にどうか報いてくれましたが、イチゴの取れる期間は短く、年収はスズメの涙ほどでした。

私の家は道沿いにあったので、家の前にかごに入れたイチゴを並べ、一かご幾らで売りました。お陰で40ドル程の収入がありました。わずかな金額ではありましたが、それとて、長いことお目にかかったこともない現金でした。什分の一もたったの4ドルで、涙の出そうな程の少額でしたが、4人の子供を抱えた我が家にとっては、その4ドルでさえも、あればいろいろと使い道のある、のどから手が出そうなお金でした。しかし、私は意を決して、什分の一を納めることにしました。

すぐには、これと言った恵みはありませんでしたが、正しいことをしたのだという満足感がありました。しかし、その翌年のことです。その辺一帯のイチゴの葉に、班葉病が蔓延したのです。作物という作物は、文字通り全滅でした。——私の畑を除いて。我が家の畑の作物は元気に育ち、水分のたっぷりあるイチゴが、山のように取

れたのです。

何キロも離れたあちこちの村から、大勢の人が我が家のイチゴを買いにきました。お客たちは、私たちが病害に強い品種のイチゴを植えていたのだと思って、その苗を買いたいと言ってきました。我が家の苗も他の畑の苗も同じだと言うと、何か特別な手入れをしたに違いないと思い込み、普通の世話をしただけだと言っても、信じてくれない有様でした。私たちは、前の年に、什分の一を納めたことを力説しました。しかし、その辺りには、末日聖徒はごくわずかしきいませんでしたから、大抵の人はいぶかし気に什分の一の説明を聞いていました。

祝福は、いつもはっきりした形で現われるとは限りません。仕事上の成功、よい職に就くこと、健康などの恵みをいつも受けている末日聖徒は、そのことについて余り深く考えないかも知れません。しかし、不景気のさ中であって多大な収穫という形でやって来た祝福を思う時、什分の一を納めることによって恵みを受けることができるという事実を、私は否定することができないのです。

実りある結婚生活を築く

ヒュー・W・ピノック



私はこれから、この地上の生涯の大切な一時期を、実りある結婚生活を築くために捧げようとしている人々に、幾つかのことを申し上げたいと思います。

数年前、フロリダに行った時のことですが、世界的なマラソン走者、フランク・ショーターと会う機会がありました。彼は1972年のオリンピックでは金メダル、1976年にも銀メダルを獲得し、ほかにも長距離走では何度も優勝したことがある人です。私はその練習のスケジュールについて聞き、彼が一流の競技者足るべく、実に多くの時間を使っていることを知らされました。彼は食事、1日の練習量（ついでながらいうと、彼は1日に約32キロを走るのです）、試合に勝つための心構え、ほかにも自ら選んだ道を窮めていくことにつながる数多くの事柄をよくわきまえていました。

フランク・ショーターを初めとする、仕事、趣味、学業など自ら選んだ分野で成功を取めている人々のことを思い描きながら、私はひとつのことを思いました。「もっと多くの夫婦が彼らと同じような気持ちで実りある結婚生活への努力をしてもいいはずなのだが。」

価値のあることで、簡単に達成できるようなものが果たしてあるでしょうか。強い絆で結ばれた結婚生活、揺るぎない家庭に勝るものがほかに何かあるでしょうか。私が話したいと思うのは、再婚した人も含めて、実りある結婚生活を願う人々に対してであり、安易な答えを求めている人、安らぎのないまま妥協をし、それに耐えることをよしとしているだけの人々に対してではありません。

強い絆で結ばれた結婚生活というものは、厳しい試練の後に来るものです。永遠に続

く素晴らしい結婚生活は、苦しみ、悲しみ、誤解、誘惑などに遭遇し、それらを克服した夫婦に与えられるものです。しかし私は過去に目を向けようと言うつもりはありません。そうではなく、現在と将来に目を据えたいと思います。

より良い結婚生活を築くためにという本もありますが、残念なことに末日聖徒の役に立つものはあまりありません。末日聖徒の結婚生活、家庭生活は神の教えと原則に基づくもので、この世的な考えや問題解決法の上に成り立つものではありません。結婚してからどの位経ったかということに関係なく、結婚生活をよりよいものにする上で多くの人々の役に立つ提案を幾つかしたいと思います。私はこれまでに様々な人に会い、その人々が味わっている喜びについて話を聞く機会がありましたが、その喜びは皆さんの多くが知っているひとつの真理の中に存在するものです。結婚生活は時と共に徐々に良くなっていく、という真理がそれです。苦しみ、喜び、悲しみの時を経て、幾多の困難を切り抜けたその後、ようやく真の愛を見いだすことがよくあるものです。



第1点となるものを申し上げます。これは根本的なもので、救い主とその教えを私たちの心と家庭の中心に据えなければならぬということです。本当に実りのある永遠の結婚は、キリストを基としなければなりません。教義と聖約 121 章に述べられて

いる原則は神権者に向けられたものですが、夫婦にも当てはめることができます。

「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。

また、親切と淨き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。

……信仰ある家族に対して汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。」(教義と聖約121:41-42, 45)

建物が存続するためには、土台がしっかりとしていなければならないように、家庭には、救い主とその教えという確かな基が必要なのです。私たちは霊にかかわる事柄を信じ、問題の解決に当たっては、みたまの力に頼るべきであると信じています。1日も欠かさず、少なくとも日に2回、信仰をもって共に祈ることを絶やさないなら、それは確かに達成できることなのです。



第2点は、ふたりの間にある意見の相違を見て、その結婚が失敗であったと考えるようなことがないようにということです。本当に心を通わせるためには、食い違いが出てきた時に、相手のことを思いやりながらも同時に率直な態度を心がけなければなりません。なぜ苦しんでいるのかをよく分

かるように説明し、自分の気持ちを知ってもらう必要があります。これは怒ったり、一時の感情に押し流されたりせずに行うことです。内向的で、思っていることを口に出さない人は、いろいろと病気にかかりやすいものです。また、それに劣らず心しなければならぬのは、そのような態度では問題は解決しないということです。

いつもお互いに正面から向き合う率直な態度を忘れないようにして下さい。相手がけんか腰の態度でくると、黙りこくったり、ふいと外に出て行ってしまったりする人が多過ぎます。ある時私はひとりの若い奥さんから相談を受け、御主人に夫婦の話し合いを持つよう言って欲しいと頼まれたことがあります。「意見の違いが出ると、主人は決まって黙りこくってしまうんです。それで家から出て行ってしまったかと思うと、頭が冷えるまでは帰って来ません。帰って来ても、私の方から折れるまでは、取り付く島もないんです。1週間でも2週間でも、ひと言も口を利いてくれないこともあるんです。」

夫婦間の考え方の違いというのは、互いに人間であり、完全な者ではないことの表われに過ぎません。お互いの違う点についてよく考えるなら問題は解決できますし、夫婦の絆を危うくさせることもありません。また、自分たちの結婚生活はまあまあのもので、感情の行き違いがあっても、それはお互いの気持ちを汲み取れなかっただけのことでと考えることもできます。

何年も前、監督をしていた時のことです。自分たちの両親の間には愛がなく、このままでは、家庭の不和が元で離婚してしまうのではないかとまで考え、不安と当惑の内にも私のもとへ来た若人がたくさんいました。

彼らのことでは大いに考えさせられました。私はその親たちをよく知っていましたし、夫婦として深く愛し合っていることも承知していました。それで、心配する気持ちは分かるが、それは夫婦の間ではよくあることで、すぐ家庭が崩壊するなどと考える必要はないと説明してやりました。

3

第3点は、ふたりだけの時であっても、人前であっても、決して自分の連れ合いを辱めるようなことをしてはならないということです。気心の知れた者同士のユーモアと考えてそういうことをする人がいますが、決してそのようなものではありません。それは相手を侮辱することであり、夫婦の絆を危うくするものでもあります。辱めを受けた人は心に深い傷を受けます。内輪の話を持ち出して自分の連れ合いをもの笑いの種にするような行為は、思いやりのなさ、あるいは欲求不満や、心を傷つけられたりした場合に心の奥底に生じる敵意、怒りの表われです。互いに敬い合っている夫婦なら、相手の体面を傷つける、そのような行為は決してしません。

4

第4点は、お互いにあまり無理をして、自分の感情を抑え過ぎることのないように

ということです。結婚して何年もたつひとりの婦人がいます。彼女は愛の精神にあふれた人で、私はその素晴らしい結婚生活の秘訣をひとつ聞かせてもらったことがあります。彼女はこう言いました。「私の務めは夫がその力を思う存分発揮できるような家庭環境を作ることです。あの通り夫は父親、監督、社会人としてとても忙しくしています。でも夫も私が自分の可能性を伸ばせるように助けてくれるんです。」

妻の励ましを得て、彼は立派に監督の職を果たしました。彼女も後にふたつの補助組織の副会長を務め、ステーキ部の扶助協会会長にもなりました。彼女は自分の部屋を持ち、そこで縫い物をしたり、絵を描いたり、美しい詩を作ったりしていました。それで彼は何の気兼ねもなく、釣り、絵など自分の好きなことに身を入れることができるのです。相手のわがままに不満を募らせていくなどということは、このふたりにはありませんでした。お互いに相手が必要としているものと、その目標とを認め合っていたのです。

最も理想的な結婚生活とは、ふたりの愛を主に育てていただくという気持ちで、夫婦が足並みを揃えることにあるのではないのでしょうか。そのような夫婦は互いに関心を示し合いながらも、相手が自分自身の進歩と成長をはかり、思うままに新たな目標を定めてその達成に努めることができるように心を配ります。むろん、そこにある自由とは、相手を自分の思いのままに扱うというようなものではありません。嫉妬は、人を縛り付けておこうという心理がわずかに形を変えただけのものであり、人の心を踏みつけにする最たるもののひとつです。

相手の愛を失うことを恐れている夫婦は

独占欲を^こ高じさせて、互いの絆を弱めています。「妻を自分の目の届かない所に出したくない」などと考えている人は、その恐れ^この気持ちがかえってあだとなって、結局は妻を自分の方から遠ざけることになりかねません。夫婦はそれぞれの成長と意思表示のための自由を、互いに認め合わなければなりません。ふたりがそれぞれに才能を伸ばし、楽しみを持った生活を送ることができるなら、倦怠感や偏狭な考えに結婚生活を悩まされるようなことはそうはありません。

5

第5点は、機会あるごとに互いのよいところを心からほめ合うということです。ある中年の婦人が次のように言うのを聞いたことがあります。「うちの夫には、高慢ちきにならないように言うてくれる人がいないとだめなんです。自分を過大評価してしまうんです。」何とも嘆かわしいことです。夫というものはだれでも、自分を励まし、誇りを持たせてくれる妻を必要とし、妻もまた、自分を尊び、敬ってくれる夫を必要としているのです。心からのほめ言葉をもって互いに励まし合うのは、決して弱さの表われではありません。当然の姿なのです。伴侶となる人と共に聖壇の前にひざまずき、永遠の誓いを交わすことのできる人なら、相手の良いところを数多く見つけ、ほかの人と話をする時に、そういう点を引き立ててやることもできるはずですよ。

これまで何度もカウンセリングをしたことがあります。離婚をした人々がよくこ

ういうことを言います。「あの人と別れてからもう3年になりますが、元の生活に戻れたらとつくづく思います。ひとりきりの生活はやりきれません。私が夫婦の対話をなおざりにしていたんです。」「彼女には悪いところなんてなかったんです。そのことだけは彼女に知って欲しいと思ってます。私がばかでした。彼女の良いところを決してほめようとしないで、いつも粗探しばかりしていたんです。つれない態度で、冷たくあしらっている夫婦がよくいますが、手遅れにならない内に目を覚ましなさいと、声を大にして言ってあげたいですね。皮肉を言うのはやめて、互いに励ましの言葉をかけなさいって。」

夫婦というのは、相手からほめられると、その言葉通りの人間になるところがあります。また、自分が誇りとする連れ合いの賞賛や励ましなら、それに応えて大概のことはするものです。

何年も前のことですが、適齢期を過ぎても独身でいた私のある友人が婚約をしました。彼が選んだ相手の女性を見て、多くの人は意外という顔をしました。とても彼ほどに教養があり、人付き合いがうまく、思慮分別をわきまえた人とは思えなかったからです。だれの目にもそれは不釣り合いなものでした。それから私たちは結婚するまでのふたりの様子を、教会を初めとする様々な場所で見てきましたが、彼は彼女に対してどのような時でも親切に話しかけていました。学校から本を持ってきて、それを一緒に読むこともありました。彼はほかにもいろいろな方法で、彼女がもっと成長し、魅力的な女性になれるように助けましたが、同時にそれが、彼の成長につながったことは言うまでもありません。この夫婦は今遠

く離れた地で伝道の責任を果たし、満ち足りた人生を送っていますが、それは、人の役に立つ、思いやりのある人間になりたいという彼の願いと、ふたりの間にある深い愛によるものなのです。



第6点は、互いに対話を拒むようなことをしてはならないということです。私たちは「ひとりにさせてくれないか。考えなくちゃならないことがあるんだ。ぼく自身の問題だから自分で考えるよ。今はひとりきりになりたいんだ」などと口にするのですが、これは正しいことではありません。またそれは、相手に対して不実であり、無礼の極みであるにとどまらず、愚かなことでもあります。互いに苦しみを分かち合い、助け合うということがないとしたら、結婚には一体どのような意味があるのでしょうか。私たちは次のような言い逃れをよく耳にします。「今大変な時なんだ」「気分が良くないから」「仕事が大変なんだ」「子供のせいで一日中気が狂いそうだわ」しかし、そのどれを取っても、あなたを愛してくれる人との話し合いを拒否する正当な理由とはなりません。

心のドアは開けておかなければなりません。他の人を寄せ付けようとしないうちこそ人の助けを最も必要としている時、というのはよくあることです。言うまでもなく、私たちは皆、ひとりになったり、頭の中で思いを巡らしたり、黙想し、祈りを捧げたりする時が必要です。また同じことを他の

人も必要としていることを理解し、認めなければなりません。しかし、自分のことを心配し、力になりたいと思っている伴侶に対して、思いやりや感謝の念に欠けた振る舞いをして許されるものではありません。特に、何か問題がある時に、このことが言えます。



第7点は、「私が悪かった」ということを口に出して言うことです。それも心からそれを言うことです。たとえ悪意がなかったにせよ、失敗をして人に迷惑をかけ、それを謝罪しなければならなくなるということはいくらでもあります。謝罪の言葉と共に忘れてならないのは、赦しの言葉です。イエスは、天父の赦しを得られるかどうかは、自分に対して罪を犯した人を赦せるかどうかにかかっていると教えられました。(マルコ11:25-26参照) 私が知っている中で、揺るぎない結婚生活を送っている夫婦は、互いに自分の非を認め、赦し合うことのできる人でした。

大分年をとってから結婚したひと組の夫婦がいました。奥さんの方は婚歴がりましたが、御主人の方は初婚でした。初めは楽しい生活が続きましたが、数カ月経ち、ふたりの間に激しい意見の衝突が起きました。御主人は苦悩のあまり、毎日の仕事にも手が付かない状態になってしまいました。

彼はその危機に直面して動揺しながらも、その問題についてじっくり考えました。そして、少なくとも責任の一端は自分の側に

あることに気付いたのです。彼は妻のところに行き、ごちない様子で何度か口ごもるようにながら言いました、「私が悪かった」と。奥さんの方も泣きじゃくりながら、問題の大半は自分の責任であり、赦して欲しいと言ったのです。彼は妻の手を握りながら、これまで自分は人に謝ったことがなかったと告白し、これからはどのような問題が起きて大丈夫だという思いを持ったのです。彼女の心には安らぎがありました。それは互いに自分の非を認め、赦し合えるようになったからです。

夫婦は自分が悪かったと、しかも心の底からそれを言うことに加えて、過去のいさかいや間違いをほじくり返すようなことを避けなければなりません。数多くの夫婦が深刻な危機を乗り越え、実りある生活をしていますが、それは罪に対する神のみこころに添った悲しみと、その後に来るキリストが示されたような赦しとがあった場合だけです。



第8点は、問題が起こった時、家族の中の然るべき人、監督、ステーキ部長以外には、第三者に頼ってはならないということです。このような人々は思いやりと靈感に満ちた方法で、必要に応じ適切なカウンセラーを紹介してくれるでしょう。私たちの周囲には、心に痛手を負った人を慰めてあげたいといつも考えている人がいます。そして既婚者でその家庭の中に話し相手がない場合、残念なことながら家庭の外に友

達を求めようとする人が非常に多いのです。

そして姦淫の罪というものの多くがそこから始まります。それは近所付き合い、あるいはワード部聖歌隊、職場などの中で起きることもあります。人知れず行なわれる事柄も、最初はただ互いの苦しみについて話し合うという何の悪意もないところから始まります。しかしふたりはやがて互いに頼りにし合うようになり、その行き着く先は伴侶以外の人に忠節と愛情を向けるようになるという例がほとんどです。そしてその後に来るのが姦淫の罪です。夫婦間の問題は先に挙げた家族の中の然るべき人、監督、ステーキ部長のほかには、たとえ同性の親友であろうとも第三者に打ち明けるべきではありません。そこから他の人に話が広がるということがよくあります。主を信頼し、監督、ステーキ部長に助けを求めて下さい。主が定めたもうたこの手順は簡潔ながら、頼りになるものです。



第9点は、結婚生活の中に喜びを絶やさないようにするということです。神は私たちが喜びを得るようにと望んでおられます。(I ニーファイ 8 : 10 ; II ニーファイ 2 : 25 参照) 結婚生活というものはほとんどの場合喜びと共に始まりますが、夫婦関係がうまくいっているケースは、皆その喜びがずっと保たれています。結婚生活の中から喜びが消えてしまった時、それはもろく壊れやすいものになってしまいます。どこか幸福な家庭の中をのぞいてみて下さい。そ

ういう家庭は幸福そうな夫婦がかじを取っているはずで。共に笑い、共に何かをすることを忘れた夫婦は、互いの愛と、共に生きていくための力を失いつつあるのです。真の愛の中には、喜び、また子供と変わらないような特質が見られるものです。つまり楽しさがあるのです。

10

第10点は、祈りを絶やさないようにするということです。アダムとイヴは、その不安の時に、つかの間の不従順を神のみ顔を避けることによって、その場を取り繕おうとしました。隠れるのは人であって、神ではありません。神が人類最初の結婚に関与しておられたのは真実です。そして神は今も、すべての結婚に心を寄せ、関与しておられるに違いありません。一番良いのは、夫婦、子供が共にひざまずいて祈ることです。それができない場合でも、揺るぎない結婚生活と、自ら受けるに値する幸せとを夫婦で祈り求めるべきです。私たちが持つ弱さ、人生で直面する困難な問題は、いかに強い絆で結ばれた夫婦の絆といえども、神の助けなくしてはとても立ち行けなくなるほどの影響を、結婚生活に及ぼしているのではないのでしょうか。救い主は結婚生活の病を癒し、健康なものにして下さいます。

将来がどうなるかは現在にかかっているのです。ですから今のこの時をしっかりと生きなければなりません。この人生はたちまちのうちに過ぎ去っていきます。幸福に満ち足りた日というのは、負債をすべて返

済し、子供が大きくなって、第一線を退いた後にいつかやって来るものなどと夢想する愚行を犯してはなりません。人生の善きものを楽しむのは今という時なのです。善は常に悪を凌駕よぶします。今この時に、何が善かを認識し、お互いの生活を楽しいものにしようではありませんか。

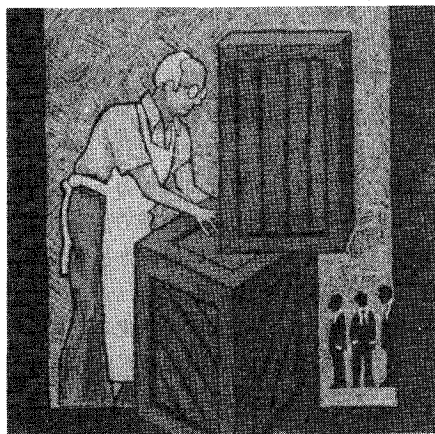
話し合い

この記事を読んだ後で、以下の点について夫婦で話し合うとよいでしょう。

1. 何事をするにしても、それに対する心構えが大切です。幸せな結婚生活を続けていくためには、どのような心構えが必要でしょうか。
2. 主のみたまを悲しませ、家庭の中から退き去らせるのはどのような態度でしょうか。
3. 口を利かないようになると、問題はさらに深刻になります。問題解決のための最も有効な方法は何でしょうか。
4. どうしても自分に非があるとは思えない場合、その納得できない気持ち克服するにはどうしたらよいでしょうか。
5. 夫婦が互いの愛情や感謝の念を表わす方法で、言葉による以外のものとしてはどのような方法があるでしょうか。
6. 結婚生活を幸せなものとするための10の提案の中で、あなたにとって最も役立つものはどれでしょうか。

心に残った 6つの話

トーマス・W・ラダニュー



教会の集会に出席していて、最後まで耐えられるかなと思ったことはありませんか。人生の最後までとは言いません。集

会が終わるまでです。内容が貧弱でだらだらとした話や、口の中だけでもぐもぐ言っているような話、気の抜けたような一本調子の話、こういった話をじっと聞かなければならなかったという経験はありませんか。話者は何を言おうとしているのだろうと首をかしげながら話を聞いていたことはありませんか。

立場を変えて、あなたは話者として何の準備もせずに聴衆の前に立ったという苦い経験をしたことはありませんか。そして、あなたの話を聞こうともせず、つまらなそうな顔をしたり、居眠りを始めたりする会衆を見ながら、情けない思いをしたことはありませんか。せっかく締めくくりの取って置きのところ（せめてそこだけはと、よく準備をした部分）を話しているのに、会衆席からはいびきが聞こえてきたというような経験はありませんか。

教える立場、指導的立場にある私たちの中には、話し手としての能力と経験を身に付け、上手な話し方をする人が大勢います。一方、そういったことの不得意な人、まして経験の乏しい人の数も少なくありません。改宗者である私は、次週の聖餐会の話者が自分であるという発表を聞かされた時の、あの不安と恐れのお気持ちを今でもはっきりと覚えています。しかし、このようないろいろな場で話す責任を与えられたことによって、私は話をする際に必要な正しい原則を学び、応用することの大切さを実感するようになりました。

公の場で話す場合に役に立つ、また応用すべき基本原則が幾つかあります。これは当たり前のことなのに、以外と実行されていません。(1)テーマに関係のある適切な資料を探す。(2)選んだテーマに精通する。(3)誠意をもって臨む、(4)制限時間内で話す。(5)テーマからそれない。(6)大きな声ではっきりと話す。(7)熱意をもって話す。(8)聞く人の心に訴える話や実例を用いる。(9)適切などころに視覚教材やユーモアを入れる。(10)霊的な準備をする。

教会員として、また学生、話し方教室の教師として、私はこれまで素晴らしい話を数多く聞いてきました。次に挙げる例は、教育を受けた人の話、そうでない人の話など様々ですが、どれも先に挙げた正しい原則に従ったものであることが分かります。しかもこれらの話には共通して言えることがあります。それは最も大切なことです。すなわち、どの話も人の心に訴えるものがあるということです。

1. 20年以上も前に聞いたこの話は、話者がテーマに関する適切な資料を選び、そのテーマによく精通することが、話というものにどれほど訴える力を増し加えるかを示しています。

ニュージャージーに住んでいた時、私は食器棚の販売店を営んでいました。私は長年食器棚の製造と取り付けをしていましたから、良い物を見分ける目は持っていました、自分のところで扱っている木工製品

には自信がありました。

ある時、ペンシルベニアにある大手の家具メーカーから、製品を取り扱ってほしいかという依頼がありました。私は、まずその会社を訪問し、製品を見てから返事をさせていただけたいと返答しました。そして他の卸売業者と一緒に会社を訪れた際、係の人から製品を運搬する時の木わくにとどのような配慮がなされているかを聞きました。その人の話は専門用語が多いというわけでもなく、難しいことを事細かに説明するというのでもありませんでしたが、彼は自分が伝えたいと思う事柄について実によく知っていました。またその話しぶりは自然で、その場にふさわしいものであり、非常に分かりやすく、面白いものでした。

話が終わるとその人は、標準サイズの食器棚を持ってきて、それを木わくで梱包しました。次に彼は別の会社が荷造りした食器棚を持ってきて、ふたつを2階の窓から落としました。私たちに話をしてくれた人が荷造りした食器棚は全然傷が付きませんでした。しかし、もうひとつの方は修理もできないほどに破損してしまいました。言葉と実演とがひとつになって、強烈な印象を残したのです。私は、ここの製品なら大丈夫だと確信しました。目と耳に訴えることの効果がいかに大きいかを示したよい例です。

2. 効果的なコミュニケーションをはかる上で最も基本的、かつ重要な原則をひと

つ挙げるとすれば、それは誠実な態度で臨むということでしょう。自分の言わんとすることを正しく伝えていきますか。自分の語ろうとしている原則について心からの確信を持っていますか。聞き手はそれが口先だけのものかを鋭い目で見ており、そのことについて自分なりの経験を実際にしていないで得心のいく話をしようと思っても、失敗に終わるだけです。

これに関してふたつの例を挙げてみます。私はニュージャージー州で教会に入りましたが、少しして家族そろってバーモントへ移りました。そこの教会員の中には、いわゆる学校教育をそれほど受けていない人たちがいました。彼らは神の王国の実直で、力強く、誠実な働き手であり、自分を飾ることを知らない人でした。このような人のひとりが、ある地方部大会で話の責任を受けました。バーモントに生まれ育った彼は、年は60を過ぎており、だれが見ても話が上手な人とは思えませんでした。それでも、私は彼の言葉を忘れることができません。

彼は、自分には主の大切な戒めである「隣り人を愛しなさい」という教えがどうしても守れませんでした、と話を始めました。彼の会社の社長は彼に対して実に厳しい扱い方をしていました。会社内のいやな仕事をすべて彼に押しつけて喜び、昇進させることなど全く考えていないといった感じでした。彼は必死の思いで主にすがり、この耐えがたい状態が何とか改善されるよう助けを求めて祈りました。そして祈り続けて

いるうちに、社長に対する嫌悪感が和らぎ、社長のよいところが見えてきたそうです。

こうして数週間祈り続けた後、その兄弟は壇上に立ち、説教台をしっかりと握り締め、涙ながらにこう証したのです。「兄弟姉妹の皆さん、私はやっとその人を愛することができるようになりました」と。それ以来、社長との関係は改善され、会社の内外において彼の生活はよい方向に向かっていきました。心の込もった、正直で、率直で、力強い言葉でした。

3. バーモント州のある改宗者のことで同じような経験をしました。その人は改宗して間もない人で、時代ものの自動車の修復を趣味としていました。

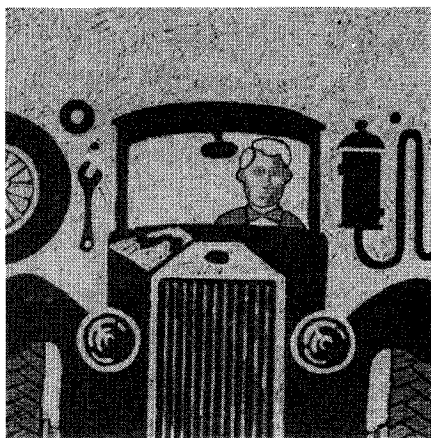
話の中で、彼は自分の趣味と、各人に与えられた不活発な教会員を活発にする責任との類似点を引き合いに出しました。そのふたつに通じるものは、誠実さでした。すなわち、時代ものの自動車に傾ける彼の愛であり、またそれよりも深い、福音を共にする兄弟たちへの愛と関心だったのです。

誠実さに加えて、このふたりの兄弟は、ほかに3つの大切な原則に従っていましたが、それによって話の効果がさらに高められました。まず、ふたりとも、決して言葉巧みな話し手ではありませんでしたが、わび言や言い訳で話を始めるようなことをしなかったということです。自分の話の内容について責任を持ち、しかも、自信を持って話していました。話の冒頭に言い訳やわ

び言を入れるのは、自分は何の準備もしていないし、気が重いとやっているようなものです。そのようなことをして、聞き手の信頼や共感を得られるはずがありません。それどころか退屈な芝居の舞台作りをしているようなものです。話すことについて決して弁解をしてはなりません。

第2は、ふたつの話とも短く、ひとつのテーマからずれることがなかったということです。話者がよく準備してきた話を、ひとつのテーマに添って自信を持ってはっきりと語り、自分の言わんとすることを伝えて着席する。これは何と爽快なことでしょう。ひとつのテーマに添った簡潔な話はいつまでも人の心に残ります。

第3は、ふたりとも全員によく聞こえるように話してくれたという点です。話が全然聞こえない、話者の言わんとすることが理解できないといった状態のままで、忍耐を余儀なくされるとしたら、聴衆にとってこれほど辛いことはないでしょう。前にマイクがあっても、それにきちんと向かって話さなかったり、低い声で話したり、顔をあちこち動かしたりしては、マイクは何の役にも立ちません。また普通の声の調子で始めても、次第に小声になったり、早口になってしまったりということがよくあります。話が聞き取れなければ、いくら話の準備をしても、みなむだになってしまうことを忘れないで下さい。ここに挙げた話し方の秘訣をちょっと心に留めるだけで、話の受け止められ方がずいぶん違ってくる



ものです。

4. 素晴らしい話をもうひとつ紹介しましょう。これはオレゴンの私たちのワード部を担当していた高等評議員の話です。これには、これまで述べてきた原則である誠実さ、適切なテーマ、確信、準備、はっきりとした口調、時間を守ることのほかに月並な話を精彩に富んだものにしてくれるもうひとつの要素がプラスされていました。それは熱意です。

この兄弟は、あふれるほどの熱意をもって、ひとつの忘れ難い経験話を話しました。そして、その気持ちが聞き手の方にもよく伝わっていたのです。彼の話は、近くの流れの急な川のほとりに、子供とピクニックに行ったふたりの父親の態度について述べたものでした。一方の父親は、小さな子供が川に近づこうとすると大声を張り上げま



した。そして子供のお尻をピシャリとたたいて、安全な所に引っ張って来ました。もう一方の父親は子供の様子を見守り、それからおもむろに子供のそばへ行き、その急流がどんなに危険であるかを実際に示してみせました。川に棒を投げ入れて、それがあつという間に流れ去る様を見せたのです。好奇心が十分に満たされた子供は、満足した様子で、父親の手に引かれて危なくない所へ行きました。

この高等評議員は、このふたりの子供の内どちらかが、賢明な親からいつまでも心に残る教訓を学んだと思うか、と問いかけていました。

私たちはこの話からひとつの教訓を得ましたが、さらに、彼の話し方からも大切なことをひとつ学びました。

人が自信を持って壇上に進み、熱意と確信と情熱をもって語る話には、安心して耳

を傾けることができます。

話し上手と言われる人の多くが守っているひとつの大切な原則があります。その原則とは例話を用いて説得力のある話をすることです。良い話というのは、個人の経験に基づくものである場合もあり、あるいは人から聞いた話で特定の聴衆に特に強く訴えかける内容を持ったものの場合もあります。

話者が「こんな話があります……」と言うや、聴き手は耳をそばだてるものです。それが個人的な事柄であったり、身近な問題にかかわることであつたりすると、聴衆の理解しようという気持ちは驚くほど強くなります。イエスが人々のよく知っている事柄や卑近な例を挙げて話をされたのは、このような理由によるのです。

5. もうひとつの大切な要素はユーモアです。これはもちろん適切な使い方をしなければなりません。適切なユーモアを取り入れた話に聞き手が耳をそばだてるという光景をこれまで何度も目にしてきました。注意を引きつけ、要点を強調すること、聴き手の関心を呼び起こして話の中に引き込むこと、これ以上大切なことはありません。人生には難しいことがたくさんあります。時折立ち止まってほほえむようなことが全くなければ、私たちは人生の荷の重さに圧倒されてしまうでしょう。ただし、注意しなければならないことがひとつあります。それは適切なユーモアを使うということです。そ

の場からみたまを取り去ってしまうようなことはどのようなことであっても避けなければなりません。

6. 私たちが教会で話の責任を受け、それを上手にしかも効果的に行なおうとする時に心掛けるべき責任について考える時、ひとつのことが頭に浮かびます。「靈的な備え」ということですが、これが応々にして軽視されがちです。これは、私たちがどのような類の話をする時にも言えることです。しかし、証を述べたり、証の準備をしたりする時にこの靈的な備えが軽視されると、問題が出てきます。なぜなら、私たちが語る「話」の中で最も大切なものは、証という形をとって表われるからです。そしてみたまは、このような靈的な備えができている時のみ、聴き手の心に証を伝えてくれるからです。この証こそ私たち一人一人が日々養い続けなければならない証、私たちが携わっているみ業が神の聖なる業であるという確信をもたらす証です。

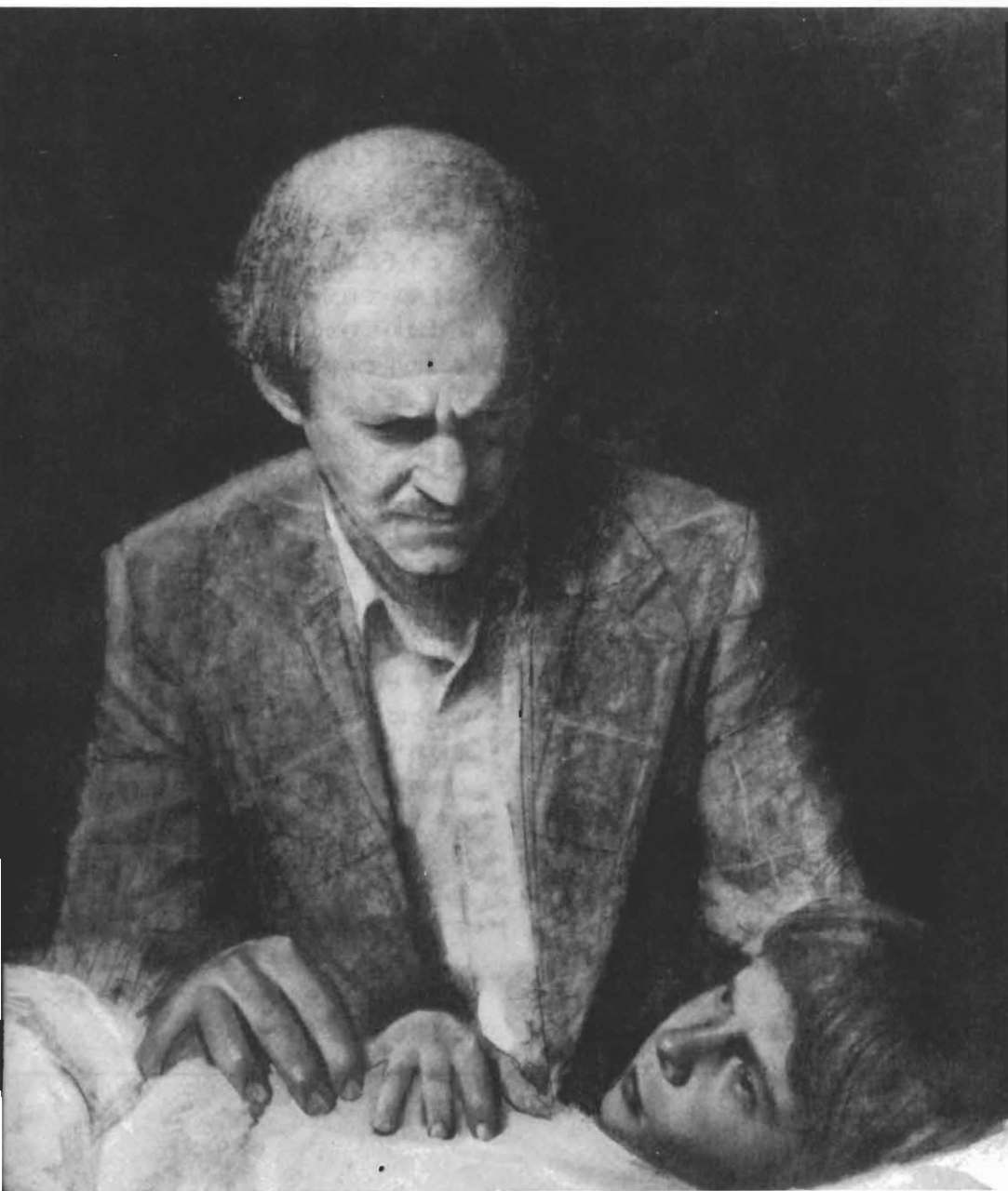
私たちは月の初めの断食証会には、断食や祈り、瞑想を行ない、主に仕えるという聖なる誓約と義務に対して決意を新たにしなければなりません。断食日はどの安息日よりも靈的な日とする必要があるでしょう。そのためには、断食をして靈的感受性を高めることによって、この世的な欲望を克服した状態で証会に出掛けることです。これはとりもなおさず、証会で口にすることはみたまと一致していること、そし

て証会の目的と主旨に合わない話や出来事をだらだらと述べるべきではないということです。

カリフォルニアのヤングアダルトとインスティテュートの大会で行なわれた、ある証会でのことでした。ひとりの目の不自由な少女が、400名ほどの人たちの前に進み出て、感動的な証を述べました。その少女は、教会に入る前に宣教師からレッスンを受けている頃から、次第に視力が衰えてきたということです。両親は宣教師と会うことも、教会に行くことも断固反対で、なんとか宣教師とのレッスンをやめさせようしました。その時彼女は、自分にとって心の目を持つことの方が大切だと言い切ったそうです。そして最後に証を述べて話を結びました。その証はその場にいた多くの人人の心に忘れることのできない感動を残したのです。

私たちは雄弁家になる必要はありません。ただこれらの基本的なことをよく練習し、主の助けを求めただけで上手に話すことができ、自分の思いを効果的に人々に伝えることができるようになるでしょう。アルマはこう述べています。「今お前はこのことを聞いて、私の信じているのを愚であると思うかも知れぬ。しかし見よ、お前に言うが、小さくてやさしい事から大きな事がでてくる。また小さな手段で賢い人をうち破ることがたびたびある。」(アルマ37:6)

いとし子



ジョニー

ゴードン・オールレッド

「ジョニーの顔からは血の気が失せ、
死んだようにぐったりとしていまし
た。このままでは死んでしまう。」

それは1977年2月のどんよりとした日のことでした。夕方の4時頃、大学内の私室で、夜の授業の準備をしている私に、電話がかかってきました。

「あ、お父さん、お母さん今ジョンを病院へ連れて行ってるの。お父さんにそのこと電話しといてって言われて。」娘のキャサリンからでした。

「病院って、一体どうしたの。」

キャサリンの声には何かおずおずとしたところがありました。

「実は……車で家に来る途中、ジョンがボンネットの上に乗せてって言ったの。それで私……」

「どうして、そんなこと。父さん今まで口が酸っぱくなるほど言ってきたはずだよ……」

「でもほんのちょっとの間だけだったのよ。それにスピードだってほんの少ししか出してなかったし。けがをしたのだから、車が止まった後なのよ。私だってほんとは乗せたくないって言ったの……」

「こんなことを言ってもしょうがない。それで一体どうなったの？けがはどんな具合？」

「そんなにはひどくないわ、私の感じでは。ボンネットの上から降りようとした時、仰向けに倒れて、頭を打ったの。」

私の体を冷たいものが走りました。「それで、ジョンの様子は、ひどいけがなの？痛みはどう？」

「それは大丈夫なんだけど、ちょっと様子がおかしいの。前のことを思い出すことができなくて。それと左手の指を曲げて、何かを引っかくようになっこうをするの。」

私はそれからすぐ病院にいる妻のシャロンに電話をしました。「痛みはそれほどでもないの、記憶もすっかり戻ったし。ただ病院の方ではもうちょっと様子を診たいって言うの。多分レントゲンを撮って、頭の骨にひびがないかどうかを調べるようになると思うわ。」

「そう」と返事をし、私はほっとひと息つきました。「夜の授業の準備をしておかな

いといけないのだが、もし容態が悪化するようなことがあったらここへ電話をして。すぐに行くから。」

そば降る雨が闇の中にしみ入るような冬の夜でした。私が3時間授業の教壇に立って教えている時、構内の管理人として働いていた息子のトニーが、ドアの所に姿を現わしました。そしてその後ろには大学の視聴覚器材部の部長を務める、私たちの良き友であり、隣人でもあるエバン・メモットが立っていました。ふたりの表情は重く沈んでいました。エバンのあの悲愴な顔つきは忘れることができません。今にも泣き出しそうな彼を見て、私は息子が死んだのだと思いました。

その後の数分間のことはあまりはっきりと覚えてはいません。私は廊下に立ち尽くし、ふたりの目を見詰めていました。込み上げてくる自分の苦悶の音が、まるで他人の声のように耳に響きました。「どうしたんだ」「どうなったんだ」その答えを聞いて私の頭の中は、ほっとする思いと不安とでごちゃまぜになりました。ジョニーは死んではいませんでした。しかし容態はひどく悪化し、けいれんが起きていたのです。

私たちが病院に着いた時、ジョニーはベッドの端に座り、その周りを妻と、我が家のかかりつけの小児科医グラント・ウェイと、それに2、3人の看護婦が囲むようにしていました。ジョニーは血の気のない、青白い顔で髪を鳥の巣のように乱し、ひどく衰弱した様子で、さわれば倒れてしまいそうな感じでした。周りの人々は彼のあごの下に皿のような容器を当てがっていました。その中にたまっている血を見た時、私は針

で刺されたような痛みを胃に覚えました。

「ジョニー、大丈夫か」と私は小声で話しかけ、壊れ物にでもさわるようにその肩に手をかけました。

ジョニーは口元に笑みを浮かべました。それから、つばを吐きだそうとしますが、それを受ける容器の中には思うように入らず、周りのだれかが紙でその唇を拭いていました。「あまりいい気分じゃない」「横になった方が楽みたい」13歳にしては何とけなげな子供だろうと私は思いました。

「よし。」私は体を横にするのを助けてやり、灌油の儀式を受ける気があるかどうかを尋ねました。

ジョニーは目を閉じ、苦しそうな息をしながら「うん……でも、頭をあんまり強く押さえないでよ」と答えました。エバンの方を見やると、彼の顔にも私と同じように笑みが浮かんでいました。そして私たちはあまり強く頭を押さないようにしながら儀式を施しました。

その後、廊下で医師のウェイと話した時に知らされたのですが、ジョンは後頭部を打って頭の骨にひびが入り、恐らくは内出血を起こして、血腫ができたことも考えられるというのです。ウェイはベッドのジョニーの方に目を移しながら「今のところはまずまずというところだね」と言いました。私は心もとないうなずき方をしながら、何とか良い方向に向かってくれるようにと心の中で祈っていました。

それから48時間、病院側の手厚い看護と共に、私たち夫婦も昼夜交替で付添いました。回復は順調で、退院の日取りも決まりました。ところがその退院の当日の朝6時

「ひどい苦しきようを見て、私は動
転していました。ジョニーは頭を抱
え、うめき声をあげました。」

頃のことです。ジョニーは激しい痛みを訴え、「頭がものすごく痛い。たまらないよ。ナイフで頭を切られてるみたいだ」とうめき始めたのです。

初めの内は看護婦が30分ごとに様子を見て来て、目に光を当てて瞳孔の検査をしていましたが、その時は1時間に1度になっていました。しかし、とても検査の時間まで待っていることなどできません。ひどい苦しきようを見て、私は動転していました。私が病室を出ようとした時、ジョニーは頭を抱え、うめき声をあげながら、身をよじっていました。刺激性の低い鎮痛剤を与えるとこの返事をもらおうと私はすぐさま病室に戻りました。すぐ看護婦も来るということでした。

しかし、そのすぐも随分長い時間に感じられました。ジョニーは、私が姿を見せても何の反応も示さなくなっていました。「ジョニー。しっかりするんだ。」私は血相を変えて、おおいかぶさるようにジョニーの顔をのぞき込み、その肩をつかんでいました。「父さんの声が聞こえるか。ジョニー。」しかしどんよりとした目は焦点を失い、口元には小さなあわが浮いていました。顔からは再び血の気が失せ、死んだようにぐっ

たりとしていました。このままでは死んでしまう。それはとても信じられないことでしたが、否定のしようもないことでした。

私はドアを蹴破るようにして部屋を出て、大声で叫びました。「医者を呼んでくれ、早く。」「意識が失くなっている、死んでしまいそうだ。」飛ぶようにして若い看護婦が来て、脈や瞳孔の状態を調べたり、ほかにも何か私には見当も付かないことをしていましたが、そこを離れると、驚くような大声を挙げて人を呼びました。彼女とても、そんなことは看護婦としてあるまじき行ないであると教えられていたのは確かでしょうが、周りのことなど一切忘れて、感情が先走りをしてしまうことはよくあります。

それから先、何がどうなるのか私には皆目見当がつかみませんでした。すぐさま医師のウェイに呼び出しがかけられ、私も妻のシャロンに電話を入れました。シャロンは、少しも動じることのない落ち着いた態度で私の話を聞くと、「そこには癒しの儀式の助けをしてくれそうな人はいないの」と言ってきました。

私は「何とか探してみよう」と返事をし、家の者や友人にそのことを知らせ、皆で祈ってくれるように頼んで欲しいと妻に言い

ました。

医者がそんなに速く来るとは思いもありませんでしたが、2、3分の内に、神権者でもある若いインターン、エド・パーカーが来てくれました。その上、私たちが癒しの儀式をしようという時には、いつの間にかウェイも姿を現わしていました。私はその時の祝福の言葉でどのようなことを言ったかは覚えていません。ただ、もし天父が御自分の霊の子であるジョニーの命を助けて下さりさえするなら、自分はどのようなことでもすると強い約束をしたことだけは覚えています。私が欠点を持つ人間であることは確かですが、その時以来、より良い人間となるべく努めてきました。儀式が済んで間もなく、ジョニーの目には光が戻り、昏睡状態を脱しました。わずかながら口を利けるようになり、大急ぎで駆けつけていた神経外科のJ・H・ハウザー医師の質問にもすべて受け答えができました。

そのすぐ後でハウザー医師が説明してくれたところによると、大きな血腫が脳を圧迫し、それがさらに肥大化しているらしく、「選択すべく処置法としてはふたつ。ひとつは薬で血腫を除く方法なのですが、その効果そのものと速効性についてはっきりしたことが言えないのです。もうひとつは、頭蓋骨を切開して、血腫を直接除去する方法です」というのです。

私はそれに答えて、「ジョニーをあなた御自身のお子さんとお考えになられて、思う通りになさって下さい」と言いました。それからすぐ、ジョニーは2時間は続くだろうという手術を受けるために、手術室へ運ばれました。

医師たちは「最善を尽くします」と言っただけで、ほかには何の保証もありませんでした。

その頃までには随分大勢の人々が駆けつけてきてくれていました。妻のシャロン、父（だれから言われるでもなく父が捧げてくれた祈りほど、簡潔で心の込もった祈りを私は知りません）、そして何人もの医師、兄弟、それにまことの良きサマリヤ人と呼ぶにふさわしい隣家のメモット家の人々。私たちは大きな待合室で、小声で話しながら待っていました。ジョニーの無二の友人であるメモット家のマイクは、涙で目をしばたたかせていました。彼は3日前ジョニーが路上で車から落ち、一時的に意識を失い、頭からかなりの出血をした時に、その名を叫びながら、ジョニーを我が家まで運んでくれたのです。

手術が行なわれている間に、私は、ドイツのハンブルグに行く日を前にしてプロボの言語訓練伝道部で準備をしていた長男のマークに電話をしました。またオグデン神殿に連絡して、祈りの名簿にジョニーの名を入れてくれるように依頼したところ、すでにほかのだれかがソルトレーク神殿に名前を送っているということを知られました。プロボの言語訓練伝道部の受付係から「ピネガ一部長が息子さんのお名前を神殿の名簿の中に加えるように手配されました。よろしいでしょうか」という電話があったのはそのすぐ後のことでした。もちろん、私たちはその厚意を喜んで受けました。

何と素晴らしい心の触れ合いではないでしょうか。霊的な思い、一体感、ひとつの家族のような気持ち。しかも単なる血のつながりだけではなく、私たちが言葉を交わし

たことのあるほとんどすべての人と、そのような気持ちを分かち合ったのです。そこには娘たちの友人もいました。そして病院を歩き来する多くの顔見知りの人が、立ち止まっては愛と慰めの言葉を私たちにかけてくれたのです。まるで人という人が皆、我が家の小さな息子のことを個人的に知っていて、心から愛してくれているかのようでした。

しかし、これらの愛、慰め、信仰、温かな励ましにもかかわらず、なお私の心の中からは、あの消毒剤の臭いが病院中のどこにでも浸透していくと同じように、もしかしてという不安な気持ちが胸の中に次第に広がっていきました。友人であるひとりの医師とエレベーターの所で顔を合わせた時のことです。私が息子の病状を話すと、「それは大変ですね。実は先週、ジョーンズさんの息子さんがまったく同じ事故に遭ったのです。彼の場合は手術をしたのですが、結局だめでした。」

先の電話の、「ジョニーは本当に気立てのいい子だから、早いうちに天に取り上げられるんじゃないかっていつも思っていたんだ」というマークの言葉にもそうでしたが、この医者話にも私の心は重く沈みました。私は手術室の前を行ったり来たりしていましたが、「手術中 - 関係者以外立入禁止」と固く閉ざされたドアに目をやりながら、その亡くなったという子のことを考えました。その子の父親には前に会ったことがありました。また私も一時は自分の息子が死んでしまったものと思い込みもしましたし、その家族の悲しみのある程度察することができました。それに私は、自分の息子の命の灯が消

え入りそうになった場面も直接この目で見ていたのですから。これから先どうなるかはまったく分かりませんでした。保証と言えるのは「最善を尽くします」という医師の言葉だけでした。

片腕でタイル張りの壁にもたれかかるようにしながら、私は顔を伏せ、神に尋ねました。「天父よ、ジョーンズ家の子はどうして死ななければならなかったのでしょうか。なぜ人は悲しみや苦しみを味わわなければならないのでしょうか。」もちろん私もそのような問いかけに対して主が答えを与えられるようなことはまずないということは承知していました。私は自問しました。「息子の命を助けて下さるなら、どうこうするというような私の祈りは果たして正しいものだろうか」と。ジョニーの命を助けさせてくれるなら、生涯を主に捧げるという、自分のジョニーへの祝福の言葉を思い浮かべながら、主に条件を出すようなことをした自分は一体何者なのかということを考えました。状況のいかんを問わず、常により良い生活をすべく努力するのが、私の努めだったはずなのです。

廊下には私のほかにはだれもいませんでした。私は目を閉じながら、祈りの言葉を続けました。「天父よ、あなたに条件を出して駆け引きをするような権利は私にはありません。すべてみこころのままに行なわれますように。」そしてひと時口をつぐみ、せめてひとかけらの知恵でもと、心の中で、もがき苦しんだ時に出て来たのが、「もしこれからも続けてジョニーを育てることが許されるなら、それが私たちにとって素晴らしい励ましとなるのは確かなことです」とい

「私は、駐車場から青い光がほのかに射し込むだけの暗い部屋の中で、じっとジョニーの顔を見詰め続けていました。」

う言葉でした。

手術は成功でした。妻の肩に腕を回しながら、病院から陽の当たる駐車場へと出て行ったあの冬の日の朝のことは今でもよく覚えています。私たちは互いの喜びをかみしめながら、胸一杯に息を吸い込み、神への感謝を捧げました。

その日の夜、集中医療のための機器に取り囲まれるようにしたジョニーは、頭を包帯でグルグル巻きにされ、点滴を受けていました。時々うめき声を出し、その度に私は冷や汗の出る思いをさせられました。それでも、翌日の午後には大分良くなり、小児科病棟に移るまでになりました。

夜は私が病院に泊まり込みを続けました。日中は妻が代わってくれ、大学も近い所にあったので授業は続けることができました。ジョニーの容態は急速に良くなり、その回復ぶりには医師を初め、すべての人が目を丸くしました。それでも周期的に具合が悪くなることもありました。私がジョニーの個室で毛布にくるまって寝ていた時のことでした。大きな声に目を覚ますと、自分はどこにいるかまったく分からないという様子でジョニーが浴室に立っているのです。

「どうしたんだ、ジョニー？」私は声をかけました。

「分かんない、分かんないよ」と悲しそうに言うジョニーを、私はベッドに連れ戻して寝かせました。

「痛むのか、看護婦さんに来てもらおうか」と聞くと、ため息をつき、よその方を見るようにしながら、「いや、大丈夫、頭が痛いだけ。頭の穴とこの坊主頭のこと考えていたんだ。ちょっとの間、父さんがどこにいるか分からなくて、どうしていいか分かんなくなっただけなんだ。」

私はほっとひと息をつき、息子の額にそっと手を置いて言いました。「そのことは父さんも分かっているから大丈夫。分かったね、本当に。心配することは何もないんだ。良くなったら家に帰ろう。髪の毛だってすぐに伸びてくるさ。」

すると今度はその青白い顔を私に向け、大きな目を輝かせながら「父さんみたいじゃないやだよ」と笑いかけてきました。私の頭は数年前からすっかりはげあがっていました。

私も笑いながら言いました。「大丈夫さ。父さんの髪は復活の時まで待たないといけないけどね。でもその時、父さんがどんなへ

アスタイルにするか分かるかい」

「どうするの」

「ふさふさ伸ばした髪をカールして、もじゃもじゃにするんだよ。」

「それはすごいや。」ジョニーは声をたてて笑いましたが、それが頭に響いたようでした。

ジョニーの一件を通して、前にも増して親しくなった友人、親戚、また中にはまったく見ず知らずという人もいたのですが、息子のことを心から心配し、愛を示してくれた実に大勢の人々のことを考えながら、私は、駐車場から青い光がほのかに射し込むだけの暗い部屋の中で、じっとジョニーの顔を見詰め続けていました。

「ずうっと昔、ジョニーがまだほんの子供だった頃のことだが、覚えてるかな。」私は昔のことを思い起こして言いました。「まだ1歳とちょっとの頃のことだから、覚えてなくても当たり前だけど、ロビーが24番街の古い病院で生まれた後のある夜のことだった。とにかく家には父さんとジョニーしかいなかったんだ。あれは確か真夜中だったな。ジョニーがちゃんと毛布をかけて寝ているかどうかを見ようと子供部屋をのぞいたんだ。そうしたら、廊下から射し込む光の中に、ちょうど今みたいに、大きな目で父さんの方を見て笑ってるジョニーの顔が見えてね、父さん、そこにあった古びた椅子に腰をかけた。そしてジョニーの顔をじっと見詰めたんだ。ジョニーも父さんの顔を同じようにして見詰めていた。ただそれだけのことだったけど、15分ぐらいそんな風にしてたんだ。覚えてるかな。」そして私は言葉を続けました。「父さん、それま

であんなに素晴らしい気持ちになったことは一度もなかった。」

ジョニーはまゆをひそめながら考え込む様子でした。しかし、それは決して険しい顔つきではなく、むしろ温かみを感じさせるものでした。「よくは覚えてないけど……今感じているような気持ちじゃないかなと思うよ」とジョニーはゆっくりとした口調で答えました。

私はジョニーの手首に触れてみました。そこにはしっかりとした調子の脈動があり、私は命というものを感じました。私は強くしっかりとしたその脈の響きに、ジョニーはもう大丈夫、自分で決めた外科医への道を歩み、また、地上での自分自身の特別な召しを立派に果たしていこうという気がしました。というのは、ジョニーには何か特別なところがあり、時として神の恵みの中でどんどん前へ前へと進んで行くような感じがあったからです。

その時、ひとつの言葉が私の口をついて出ました。「いとし子ジョニー」

ジョニーは私の言ったことがよく分からなかったらしく、私の顔をまじまじと見詰めながら聞いてきました。

「今何て言ったの、父さん。」

「いや、何でもない。それより、もう休もう。少しでも眠っておかないと。」それはジョニーがまだ幼なかったあの夜以来、何か特別なことがあった時のためにと、心の奥深く秘めていた呼び名だったのです。

可能性を信じる

ニール・A・マックスウェル

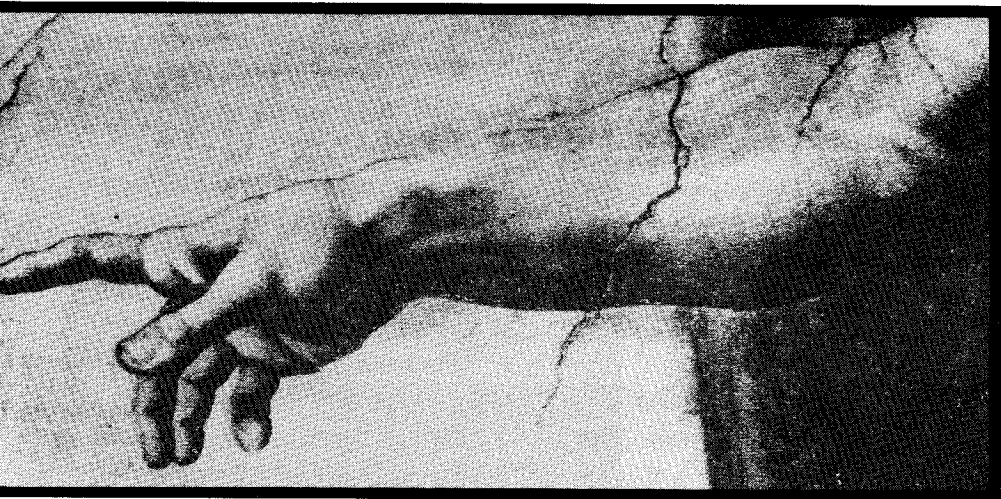


ある古代ギリシャの指導者は市民に対して、市民自身のみならずその市民の属する都市国家の文化も繁栄の道を歩んでいるのだという気持ちを抱かせるのにたけていました。それは、現時点での自分自身や国家の姿を見るだけでなく、自分たちはどのような将来性、可能性を持っているのだろうかという観点から自分自身や国家を眺めるように仕向けたからです。教会の若人の皆さん、皆さんの中には自分が「不適合者」であるとか、「自信がない」と感じている人がいるかもしれません。しかし、「可能性を信じる」というこのメッセージほど今日の若人にとって適切なものはありません。

予言者エノクが召された時、エノクは自

分がなぜ召されたのか不思議に思ってこう言いました。「われは年行かぬ者に過ぎず、すべての人々われを悪む。われは口重き者なればなり。」(モーセ6:31)しかしエノクは神から召しを受ける時、問われるのは能力ではなくて、可能性であることをよく知っていました。そこでエノクは戒めを守り、自分があらゆる時代を通じて最高の町を築く人となるという、主がお与え下さったビジョンに身を委ねたのです。有史以来、すべての人々が義人となり、再び悪に戻らなかったのは、ただ一度、このエノクの市においてだけでした。しかもそのすべての始まりとなったのが、自分自身についてすらよく理解していなかったひとりの若者だったのです。

私たちは、今自分のいる地点から、内に秘めた可能性が現実のものとなるまでに引き上げて下さる神を信頼しなければならない。



もし皆さんが今自分のいる地点から、内に秘めた可能性が現実のものとなるまでに引き上げて下さる神を信頼するならば、身分や地位のためではなく、神と人間のために仕えるという皆さんの可能性は無限で、測り知れないものとなるに違いありません。

次に述べる3つの話はその可能性について説明したものです。

それほど昔のことではないのですが、ニュージーランドのマオリ族の村にひとりの男の子が生まれました。祝福は祖父から受けたのですが、その祝福の中で、この子はいつか教育界で民の間に立つ指導者になると告げられました。村の中にはその祝福を聞いて笑う者もいました。全く現実とは程遠い言葉だったからです。この少年バーニ

ー・ウィホンガイは後に博士号を取り、現在ニュージーランドのチャーチ・カレッジの学長をしています。彼がこのチャーチ・カレッジの学長になったのは35歳の時で、その後次第にニュージーランドのほかの教育者にも大きな影響を及ぼすようになりました。赤ん坊の時は、受けた祝福を物笑いの種にされたウィホンガイ兄弟でしたが、今日では、彼の話聞き、鼓舞されている人は数え切れない位多くいるのです。靈感によってもたらされる祝福は、自分の可能性を知る上で大きな助けとなります。もちろん、実行と忍耐が次に来なければならないことは言うまでもありません。

朝鮮戦争の時、リー・ホー・ナムというひとりの青年が、軍法会議に参与するアメ

リカ軍人の一団を支援する任に徴用されました。その時、普通の人生コースから外されたその出来事は、悲劇のように思えました。しかしリー兄弟は古代エジプトのヨセフと同じように最善を尽くしてそのチャレンジに応えました。第二外国語である英語を熱心に勉強し、アメリカの兵隊たちが行なっていることを注意深く観察しました。特にひとりの末日聖徒の将校は、ほかの兵隊とどこか違っていました。リー兄弟は次第にその将校を尊敬するようになりました。ふたりはしばしばいろいろな問題について話し合いました。ある日、その将校がリー兄弟に人生の目的とは何かと尋ねてきました。リー兄弟は何と答えてよいか分からずに、ただ世の哲学者たちが何世紀もの間取り組んできたがいまだに解決を見ていない問題であると言いました。将校は1枚の紙を取り出すと、それに救いの計画の概略を書き出しました。その時、主はみたまの力によってこのアメリカ人の言ったことが真実であるという証をリー兄弟の心の中に告げたのでした。リー兄弟は福音を勉強し、そして教会に入りました。その時の紙は記念すべき宝として長い間大切に保存しています。

程なくして朝鮮戦争は終わりましたが、リー兄弟の教会生活はそこからがスタートでした。やがて30歳半ばにして、リー兄弟はアジア大陸における教会の最初のステークス部長になりました。彼は今、韓国の釜山の伝道部長として傑出した働きをしており、韓国における卓越した指導者となっています。リー伝道部長は宣教師や会員たちに、今ある姿ではなく、こうなるであろう姿を希望を持って見るように教えています。一見して悲劇と思われることの中に大いなる

機会が隠されていることがあるのです。

エノクのように、皆さんは主を信頼する必要があります。皆さんが正しければ、神の目的は達成されるでしょう。エジプトのヨセフは自分が受ける虐待に対して、苦々しい思いを抱いても当然のようなことが何度かあったのですが、それでも正義を守り通しました。自分が苦難から立ち上がるだけでなく、他人をも引き上げ、何百万という飢えた人々を救ったのでした。ヨセフの兄弟たちが自分に悪をなそうとした時も、主は、ヨセフの少年時代の夢をはるかに越える恵みを与えられるためにその悪計を利用されたのです。(創世50:20参照)

数年前、イタリアで末日聖徒の宣教師が何人かの若者たちから敵意をあらわにされたことがありました。そうした事件に2度関係したのがフェリーチェ・ロチートという名前の若者でした。彼はひとりの勇敢な宣教師から、末日聖徒の教会に来て、自分の目で確かめたらどうかと言われました。フェリーチェは勇を奮ってそれに応じることにしました。フェリーチェは教会に来て人々の話を聞き、福音を勉強しました。そして福音を信じ、ついにバプテスマを受けたのでした。後に彼は宣教師となって英国に渡り、そこでさらに信仰を磨き、英語を話す力も前にも増して伸ばしました。フェリーチェは名誉ある伝道を終え、帰国するとひとりの美しいイタリア人女性とスイス神殿で結婚しました。そして現在、1,000人近い学生が参加している、イタリアのセミナリー・インスティテュート・プログラムの指導主事を務めています。

1980年7月、フェリーチェ・ロチートは32歳でイタリア・パドバ伝道部の伝道部長に召されました。神はフェリーチェ自身も

気付かなかった可能性を知っておられたのです。散々宣教師を困らせてきたフェリーチェではありましたが、福音が示された時、それを信じる誠実な心と知性を彼は持ち合わせていたのです。フェリーチェ・ロチートはこれから数多くの同胞に手を差し伸べ、何百人もの宣教師の心を動かす人物となるでしょう。かつてはその宣教師を、彼は痛烈に批判していたのです。

自分が現在どうあるかではなくて、将来どうなるかという可能性を信じようではありませんか。

神を信じなければならない理由のひとつとして、私たちには現在起こっていることしかわからないが、神は将来のことも御存じであるということがあります。次の話はそのことをよく説明しています。

1945年5月、憶病で何の役にも立たない一歩兵として沖繩戦線に参加した私は、そこで魂を揺り動かされる、また信仰を深める経験を幾つかしました。そのひとつは、味方の軍が放つ迫撃砲の砲弾の雨の中で、自分の祈りに対する主の答えを聞いた時のことです。その時私は、主が自分の祈りを聞かれ、祈りに答えて下さることを改めて知ったのです。それは人が本当に困った時に捧げる、利己的とも言える心に思うままを述べた祈りでした。私は、もしも主が私の命を救って下さるならば、生涯主に仕える道を選ぶと約束したのです。祈りはすぐに答えられました。その時、私は愚かにも自分は主にお返しができるものだと思っていました。しかし、それ以来、私は主に対してますます深い恩義を感じるようになってきています。

1973年に沖繩に立ち寄った時、私はあの塹壕戦壕のあった場所に行ってみました。今は

一面のさとうきび畑です。その後、そこから丘を2つ、3つ越えたところにある礼拝堂で、会場を一杯に埋めた沖繩の聖徒と軍人たちに話をするように頼まれました。何年も前のことでしたが、そこから程遠からぬ所で、私は戦友たちとあの恐ろしい夜を過ごしたのです。その沖繩には現在ステーキ部があります。

あの1945年の春に、後にこのようなことが起こると、たとえ知らされたとしても、私の智と情でそれを受け入れ、理解することは不可能だったでしょう。主には予見する力がありますが、私にはなかったからです。

初めを見、終わりを見、その間に起こるすべての事柄を御覧になる主を信頼して下さい。神は現在の皆さんの姿だけでなく、皆さんが将来どうなるかをも御覧になるのです。たとえ自分がふさわしくないと思っても、それでせっかくの成長の機会を棒に振ってしまったら、いろいろな難しい問題に立ち向かおうという気力を失くしたりしてはなりません。時間の圧力に負けて自分の永遠の進歩の妨げとなるような選択をしてはならないのです。

主はイタリアの街角で選ばれた者に手を差し伸べ、ニュージーランドの貧しいマオリの村で約束を与え、朝鮮戦争のさ中に行なわれた静かな会話の中で真理の光を投げかけられたのです。あの時の身動きもできない塹壕から、はるかかなたに目を投じ、私たちが望むならば、やがて礼拝堂を目にすることができるよう、私たちを備えられたのです。戒めを守ってさえいれば、私たちは自分が想像し得る以上の奉仕の機会を得るに違いありません。私がこれまでに述べてきたような機会は、今皆さんの周りにもあるのです。

その日の午後一杯を使って、私は会った時に言う言葉を15歳の頭であれこれ考えていました。イランのテヘランの町の雑踏の中を姉とスクール・バスで帰る時も、私は、自分が頭の中で描いた言葉を何度も繰り返していました。

キンボール長老は背が高く、白髪で、しかも、モーセのような声で語るまさに使徒にふさわしい人に違いないと思っていました。「家に帰ったら、キンボール長老はき

っと、なぜ土曜日に学校に行くのですかと尋ねるに違いない。その時はイスラム教の聖日である金曜日が休みなので、代わりに土曜日に学校に行くのですと答えよう。そんなことがきっかけで多分学校の話になると思うので、それが終わってから僕の問題を打ち明けよう。」

ふと傍らに座っている姉に目をやると、何やら瞑想にふけっているようでした。私は尋ねました。

「ヨーロッパ伝道部を訪問しているキン



ボール長老がなぜここに来るの。」

「私たちね、本当はスイス伝道部に属しているの。遠く離れてて、しかもほかに教会員はあまりいないでしょう。だから自分たちの伝道部を持つことができないのよ。」

「キンボール長老は今晩、僕たちの家に

泊まるの？」

「泊まらないわ。夕食をとられるだけ。」
私は窓に目をやり、外を眺めました。いつもなら、もっと私の心を捕らえて離さないはずの町の景色やざわめきも一向に気になりません。再び、私の頭の中に、雷のよ

静かな細い声

ケント・A・ファーンズワース

うな声をした背の高い白髪の使徒の姿が浮かんできました。

私たちが家に着いた時には、キンボール長老はすでに着いていて、ひざの上に子供たちを抱いて座っていました。父に案内され、私たちが居間に入っていくと、キンボール長老は立ち上がり、抱いていた子供たちをゆっくり下ろすと、私の手を取りました。思っていたほど背は高くありません。しかし、髪の毛は確かに白く輝いています。私は、力強い予言者の声が部屋中に響いてくるのを期待しながら、キンボール長老が話し出すのを待ちました。

「こんにちは。」それは、しゃがれた小さな声でした。私は何も言えず、驚いたようにキンボール長老の顔を見上げていました。キンボール長老は笑みを浮かべ、のど元を指差してこう言いました。

「この声はね、偽物なんです。数年前に病気になって、新しい声帯を入れました。まだあまり上手に使えないんです。」

「痛くないのですか？」と私は尋ねました。話は自分が計画したのとまったく違う方向に進んでいきます。

「いいえ、でも時々、話していて疲れることがありますよ。」キンボール長老は私に、そばの椅子に腰掛けるように言うと、自分も座って子供たちをもう一度ひざの上のにせました。

「それじゃ、きょう学校でどんなことがあったか少し私に話してくださいませんか。」

私は何も言わずキンボール長老をじっと見詰めていました。両親が告げ口でもしたのだろうか。いや、きょう調子の悪かったことなどどれもまだ知らないはずです。

私は、キンボール長老の明らかな予見能力の前に、これまで話そうと思っていたことをあきらめて告白を始めました。「聖書の時間のことなんです。」

「姉と私は、プロテスタント系の学校に通っています。学校では2週間に1回、聖書のクラスがあるんですが、その先生が僕がモルモンだということを知っていて、いろいろ攻撃してくるんです。」

「それに対して君はどうするんですか。」キンボール長老の声が幾分和らいだようでした。私はキンボール長老の顔をまともに見ることができませんでした。まさか話が

これ程早く問題の核心に入ってこようなんで予想もしていなかったからです。しかも私が考えていたのとは逆に、自分に対する質問として返ってきたのです。

「何が正しいことなのかよく分かっています。」私は短く答えました。「でも心で思

っていても、それを思うように口に出して言えないことがあるんです。」

キンボール長老はぐずつき始めた子供を優しくなだめるように、うなずいていました。

「何か忘れているものがありますね。」キ

「その声はね、いつでも必要なことを教えてくれるんですよ」

ンボール長老は、がらがら声の無くなったささやくような声で言いました。「兄弟は8歳になった時、教会員に確認され、ひとつの賜を授けられたでしょう。それが何の賜かよく知っていますね。」

私はうなずきました。

「その賜は離れることのない伴侶、教師として君に与えられたんですよ。『静かな細い声』と呼ばれるのを聞いたことがあるでしょう。」

キンボール長老は身を乗り出して、その確信に満ちた手を私のひざの上に置きました。

「その声はね、いつでも必要なことを教えてくれるんですよ。そして君を助けてくれるはずですよ。その小さな声に聞き従いなさい。」

その晩、私が受けたのは思い出といった生易しいものではなく、まさに強烈な印象でした。辛抱強く相手を理解する気持ち、穏やかな心遣い、上品なニューモアなどすべてが私の心に印象付けられたのでした。そんな私も、キンボール長老が教えてくれたみたまの導きに関する短くも力強いレッ

スをどこか記憶の奥底にしまい込んでしまい、それについて深く考えることもありませんでした。現在予言者となっているキンボール長老が、その時私に何を教えようとしていたかが完全に分かるようになったのは、それから数年後のある春の夕べのことでした。

その日は空軍パイロットの強化訓練の最後の課目のひとつである単独横断飛行に出る日でした。私たち6名のパイロットは20分間隔で飛び立ち、距離を保ちながらテキサス州のルボックからアリゾナ州のフェニックスまで飛行を続けることになっていました。飛行機はT-38ジェット練習機で、コールサインはトーパー29でした。飛行機を操縦したことのある人ならだれでも分かると思いますが、離陸し、予定の高度まで上昇した時には無限の力を感じ有頂天になります。その日も同じでした。規定の高度一杯の15,000メートル上空をまっすぐに進みながら、西方の地平線に目をやると、眼下に地球が弧を描いているのが見えました。まさに天涯孤独、下になだらかに広がる大地を眺めながら、私は空の帝王の気分を満

喫していました。右翼のすぐ下には、ロッキーマウンテンの山並がその威容を見せ、地球の年齢を物語るかのようにうねりを成しています。左側は一面南部の砂漠地帯が広がり、まさに円くなった地平線まで伸びています。まさに全世界が私の足下にあるようでした。

に入る南東の航空路をとりました。ニューメキシコを横切る時、雨雲が南西方面にうねるように広がっているのが分かりました。飛行場からの無線連絡によると、この雨雲はテキサスに向かう私たちの航路を遮断するように横たわっているとのことでした。しかし前線の合間をぬって行けば、ルボックに通じる道が開けることも分かっていました。とにかく北東に向かって飛行していると、私の前を飛んでいる飛行機から天候は悪くなるばかりであると報告が入ってきました。そうしている内に先頭の飛行機がスコールの中でエンジンに故障を起こし、片方のエンジンだけで飛行場まで帰らなければならなくなりました。天上の楽園はまたたく間に地獄の様相を呈してきました。燃料は少なくなり、そうかと言って引き返そうにも別の雨雲が後ろから迫ってきます。機体にひょうが打ちつけ、稲妻が暗闇を焦がしています。底なしの深い割れ目の中で私はどう進んだらよいか分からなくなりました。そして無線機をルボック管制塔からリース空軍基地の地上管制塔に切り変えたのです。ところが、その空軍基地の滑走路

フェニックス空港に着陸し、自信に満ちた面持ちで私は滑走路を走り抜けました。

私たちは素早く燃料を補給すると、再び晴れた空に向かって飛び立ちました。最後に飛び立ったのが私の飛行機で、私たちはテキサス州のエルパソ上空を通過してルボック

わきのトレーラーハウスで、ひとりの空軍兵士がこの迷える飛行機を2台のレーダーで追っていました。1台のレーダーには高度が、もう1台のレーダーには滑走路の中央線に対比した飛行機の位置が映し出されていました。無線機の周波数をそのままセットして置くと、突然嵐の音がやみ、落ちていた、しかも自信に満ちた声がヘッドホンを通じて耳に入ってきました。

「トーゴー29、右に旋回し、方位を0—3—0にとれ。」

それから5分間というものは、その静かな声の指示に従って方向をとるための必死の戦いでした。飛行機はその声に導かれて下降を続け、突然嵐がやんで雲を突き破ったかと思うと、飛行場の光が見えてきました。飛行機が着陸すると、滑走路の中央に飛行機を止めるのもそこそこに、私はトレーラーハウスに駆け込み、声の主を両手でしっかりと抱き締めました。この5分間、私の命は文字通りこの人の手に握られていたのです。私の心は感謝の気持ちで一杯になりました。その時、私はもうひとつの声、主から召された僕の声が昔、私に語りかけ

たことが記憶の中によみがえってきました。そしてその時初めて、その僕の言ったことの意味が分かったのです。言うまでもなく、管制官の声ではない、別の静かな声が嵐の中でこう言ったのです。「私にすべてを委ねなさい。そうすれば、何をすべきか

あなたに教えましょう。」

こうして奇跡とも言える着陸をしたその日から、私は何度となく静かな声を耳にしてきました。時には注意深くその声に耳を傾けることもありましたが、空の王様という空想に捕らわれて、自分の判断に頼り、

突然嵐の音がやみ、落ち着いた、しかも自信に満ちた声がヘッドホンを通じて耳に入ってきました。

その声を包み込んでしまったこともありました。

ある時、私は休暇で英国を訪れ、系図の探求をしました。ある家系の新しい情報を求めて、先祖が住んでいたふたつの村、ガートロープとギルバーダイクの間を、私は何度も行ったり来たりしていました。ちょうど町に入るために道が分かれているところに、本道から約5.6キロほど入ったウイトギフトの村を指している標識がありました。そしてその道路標識の前を通るたびに私はウイトギフトに行くように促す何かを心感じていました。3回目にもそこを通った時には、もはや感覚的なものではありませんでした。それはあのルボックの嵐の中で聞いた管制官の声のようなはっきりとした静かな細い声で私に語りかけてきたのです。「ウイトギフトに行きなさい。」私は方向を変え、その道を下って行きました。でも、村に入る手前で車を止めてしまいました。ウイトギフトというヨークシャーの小さな町に着くことは着いても、それから先何をするのかまったく見当がつかなかったからです。結局、私は「自分の知恵」

に屈して、村に入らずにそのまま引き返したのです。

合衆国に帰ってみると、親戚の中でも最も熱心に系図の探求を進めている叔母から手紙が届いていました。その書き出しの箇所に、私がみたまの導きの声に聞き従わなかったことが記されていました。

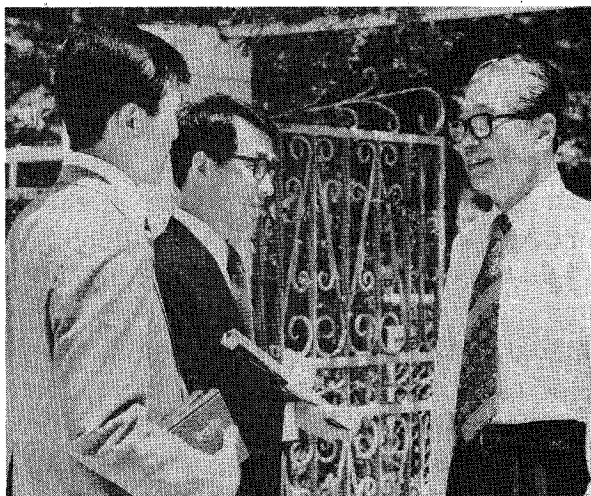
「あなたがイギリスにもう少し長く滞在して欲したらと考えていたところです。と申しますのも、あなたがイギリスをたった後、私たちの先祖はガートロープでもギルバーダイクでもない、ウイトギフトというヨークシャー地方の小さな町の出身だということが分かったのです。」

年をとるにつれ、私も少しは成長したのでしょうか。それからは判断の難しい事柄や個人的な問題があっても、静かな細い声のささやきがあったならば、それに聞き従えるようになりました。そういった時「その声はね、いつでも必要なことを教えてくれるんですよ。そして君を助けてくれるはずですよ。その小さな声に聞き従いなさい」という神から召された人の、ささやくような声をいつも心に思い浮かべるのです。

キンボール大管長, 伝道について語る

大管長

スペンサー・W・キンボール



現在, イスラエルの集合が進められています。大勢の人々がバプテスマを受け、教会に改宗しています。これからさらに多くの人々が教会に加わることでしょう。私たちはこのようにしてイスラエルの集合を進めていきます。また、これは伝道の業を通して進められます。そしてこの伝道の業

を行なう責任は、皆さんにあるのです。私は、皆さんが言いわけをして、この責任から逃れることがないように願っています。

福音はあらゆる国民のためのものです。世界中の人々は皆神の息子であり娘です。彼らは皆私たちの兄弟姉妹なのです。主イエス・キリストは「全世界に出て行って、

すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ16:15)という根本的な戒めをお与えになりました。私たちはこの義務を心から達成したいと願っています。

数年前、私は「教会員の若い男性はすべて伝道に出るべきでしょうか」という質問を受けたことがあります。その時、私は主の言葉を引いて、「ふさわしい男性はすべて出るべきです」と答えました。主は、すべてのふさわしい男性が伝道に出るように望んでおられます。従って自分はふさわしくないと人は、ふさわしくなるように今すぐ準備をしなければなりません。主は次のように命じておられます。「わが教会の長老たちを遙かに離れたる諸々の国民に遣わし、また海の島々に至らしめ、また^外外国に遣わして万国の民を訪わしめ、まず異邦人を訪い次にユダヤ人に至らしめよ」(教義と聖約133:8)

このように、長老たち、長老に聖任される年齢に達した教会の若い男性は、伝道に出る準備をし、その召しを全うできるように熱心に求めなければなりません。現在、教会の資格ある若い男性で専任宣教師として奉仕している人の数は、全体の約3分の1に過ぎません。3分の1では「すべての若い男性」とは言えません。

私がこれまで訪問してきた平均的なステークスでは、資格ある若い男性の内わずか25パーセントないし40パーセントしか伝道に出ていませんでした。たったそれだけです。他の人たちはどうしたのでしょうか。

彼らはなぜ伝道に行かないのでしょうか。

確かに、教会のすべての男性会員は伝道に出るべきです。それは什分の一を納め、

集会に出席し、悪に染まらない清い生活をし、主の宮居で日の栄えの結婚をする計画を立てる必要があるのと同じことです。

これらはどれも強制されてするものではなく、自分自身のためにすべきものです。

また、このように尋ねる人がいるかもしれませんが、「すべての若い女性も伝道すべきですか。それに父親も母親も。教会員はすべて伝道しなければなりませんか」答えは然りです。男性も女性も子供もすべて、すなわち若人も少年少女も皆伝道すべきであると、主は答えておられます。これは、専任宣教師として正式に召しと任命を受けて外国に伝道に行かなければならないという意味ではありません。そうではなく、私たちの受けている福音が真実であることを証する責任が、私たち一人一人にあるということです。すべての人に親戚や隣人、友人、職場の仲間がいます。私たちの責任は、模範と教えによって彼らに福音の真理を伝えることです。

同じ神の王国の会員である兄弟姉妹の皆さんが、主から委任を受け、主の使者としてまだ教会員となっていない兄弟姉妹に主のみ言葉を伝えることは、何と素晴らしい経験でしょう。聖典にはすべての教会員に伝道する責任のあることがはっきり述べられています。「その警めを受けしことあるすべての人はその隣人を警むる責任あり」(教義と聖約88:81)

若者たちに、同胞に仕え王国のために犠牲を払うように勧めるのを恐れてはなりません。教会の若者には、あくまでも理想を追求していくという姿勢が本来備わっているものです。ですから彼らを奉仕の業に召

す時には、ためらわずその理想主義に訴えるようにすればよいのです。

ある若者が最近語った話の中に、この理想を追求する姿勢がよく表われています。「私が専任宣教師に召される時は、ただ自分にその気さえあれば伝道はとてものためにと言われるよりも、主が私を召して、伝道に出るように望んでおられ、それが私の義務であると言われた方がいいと思います。」

教会の若い男性は皆伝道に出たいという心からの望みを持たなければなりません。彼らにはまた、子供たちを育て終えた両親が伝道に出られるよう、援助する責任があります。若者は福音を学び、教会における奉仕に自らを備え、できるだけ勤勉に戒めを守るよう努力しなければなりません。

伝道に出るために19年間準備を続けている若者は、奉仕の業についた時にはより大きな力を備えた、有用の材となり、大きな成果をもたらすようになるでしょう。そしてさらに多くの人々が教会に改宗し、そこに感動が生まれ、またそれが連鎖反応となって広がっていくのです。これ以上に大きな連鎖反応を生み出し、より多くの人人に影響を与えるものがほかにあるでしょうか。

生まれた時からセミナーの日まで、ずっと伝道のために準備してきた素晴らしい若者たちが、セミナーやインスティテートのプログラムに参加するとしたらどうでしょうか。セミナーやインスティテートの建物は、教会に対して新しいイメージを抱かせてくれる今までとは違った成熟さ、熱心さで満ちあふれるようになること

でしょう。そして若者たちの道徳観は大いに高められ、彼らはこれまでに教わったことのない方法で、純潔や義について学ぶことでしょう。そのようになった時、聖餐会と神権会への出席がどうなるか、お分かりになると思います。

私はすべての少年少女がセミナーに出席するよう望んでいます。なぜならセミナーこそ、彼らが多く福音の真理を学べる場であり、自分が何をなすべきか心の中にある理想を見だし、伝道に行く決心をするようになる場だからです。

忘れてならないのは、世界各地に出て行って福音を宣べ伝えるにはお金が必要であるということです。今から貯金を始めることは皆さんの特権であると言えます。

もらったり働いたりしてお金が入るたびに、たとえわずかでもその一部を伝道資金として貯蓄にまわすようにして下さい。それは皆さんの使命であり、特権であり責任なのです。塵も積もれば山となり、義にかなった目的のために払う犠牲が人格を築くということを思い起こして下さい。

伝道の業に仕えるという神聖な責任と特権に自らを備えることは、各人の義務です。人は文字や掛算の九九表、大学での学業に必要な事柄をあらかじめ学ぶことによって人生の備えをしています。それと同様に、幼年時代、少年時代のすべてを通して、青年期の伝道と生涯を続けて行なう霊的な成長のために備える必要があります。

そのためには、大きく分けて次の3つの点で準備をすべきです。

1. 清くかつふさわしい生活を続け、世のすべての悪を遠ざける。(主は、完全な

「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、……」(マタイ28:18-19)



悔い改めをすれば罪は赦されると教えておられます。何か問題があり、その赦しを得たいと思うならば、生活を完全に改め、新たなものとしなければなりません)

2. 真理を知ることができるように心と霊を備える。もし伝道に行く年齢に達したとしても、福音に関することであれ何についてであれ、知識を備えていなかったとしたら、それは実に悲しむべきことです。確かに若者は19歳の誕生日を迎えるまでに家庭での月並な務めから、宣教師としての大切な務めに進む備えができていなければなりません。その時になって急に生活や標

準や自己の修練といった面ですべてを改めるようであってはなりません。

3. できるだけ自分自身の準備資金で伝道できるようにする。将来の宣教師がみな誕生の当時から伝道のために貯金をしていたとしたら、何と素晴らしいことではないでしょうか。またすべての少年が伝道費用の全額、あるいは大半を自分で蓄えて伝道し、そこから多くの祝福を受けることができるとしたら、何と素晴らしいことではないでしょうか。

もちろん、十代になって改宗した少年にとっては、貯金の年数は限られます。経済



水準が低い、機会が非常に限られている国に住んでいる場合でも、この方法を採用入れ、最善を尽くすことができます。

私たちの仕事は、福音を世に広めることです。これは私たちが自分で自分に課したのではなく、神から与えられた戒めです。予言者ジョセフ・スミスはこのように言っています。「あらゆることが言われたが、最も偉大で重要な務めは福音を宣べ伝えることである。」もちろん他のすべてのプログラムも非常に重要ですが、教会に導き入れてこそはじめて人々に影響を及ぼすことができるのです。

使徒たちと共にエルサレムを少し離れた所にあるオリブ山に立って天を仰がれた時、救い主は散乱したイスラエルを集めるためになされねばならない大いなるみ業に思いをはせておられたようです。

私は、救い主がロシアや中国、インド、そしてアジアのあらゆる国々を見ておられたのではないかと思います。救い主は海の島島や南北アメリカ、そして近東の国々をも見ておられたに違いありません。

主が使徒たちを連れてオリブ山の山頂に登られた時、どういう意味でこのように言われたのでしょうか。「あなたがたは力を

受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」(使徒1:8)

これは、天の家に上って行かれる前に主がこの世に残された最後の言葉となりました。

「地のはて」とはどういう意味でしょうか。使徒たちの知っている場所は、主がすでにあまねく踏破しておられました。それはユダヤの人々のことだったのでしょうか。それともサマリヤの人々のことだったのでしょうか。あるいは近東の数百万の人々のことを指していたのでしょうか。「地のはて」とはどこのことだったのでしょうか。現在のアメリカの人々を指していたのでしょうか。地中海周辺のギリシャやイタリアの幾十万、幾百万の人々また中部ヨーロッパの人々も含まれていたのでしょうか。または全世界のあらゆる生ける人々、そしてこれから先この世に送られてくる霊たちのことを指していたのでしょうか。私たちは主の言葉とその意味していることを過小評価してはいないでしょうか。福音を必要とする人々がこの世に40億もいる中で、どうして10万人程度の改宗者に満足していられるのでしょうか。

救い主はこのように言われました。

「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し……」(マタイ28:18-19)

救い主は「すべての国民」と言っておられます。

神が私たちと共におられ、導いておられることを忘れないで下さい。神がその計画を立て、戒めをお与えになったのです。

主は、私たちがどのように福音を分かち合うかに応じて、素晴らしい祝福を下さると約束しておられます。霊的な奇跡が起こるように、幕の彼方から援助を与えて下さいます。主は、私たちが心をキリストに向け、堅く立って世の人々に証を述べるならば、私たちはもっと容易に罪の赦しが得られると教えておられます。確かに、私たちはみな自分自身の罪が赦されるように、より大きな助けを求めているのです。(教義と聖約84:61参照) 伝道に関して述べた最も素晴らしい聖句のひとつである教義と聖約第4章の中で、私たちは「すべからく心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして」伝道の業に励み、主に仕えるならば、「終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たん」と言われています。(2節)

主はさらにこうも言っておられます。

「而して汝らもし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの喜び如何ばかりぞや。さて、わが御父の国にわれの許に導きたる唯一人の人につきて汝らの喜び大いならば、汝らもし多くの人を導き来らばその喜びは果して如何ばかりぞや。」(教義と聖約18:15-16)

生涯力を尽くし、ただひとりの人であっても主のもとに導いたとしたら、どれほどの大きな喜びがあることでしょうか。たったひとりの人であってもです。何と貴い存在

でしょうか。多くの人を導くならば、神は私たちに約束された愛を注いで下さるのです。

宣教師たちは何と素晴らしい機会に恵まれていることでしょうか。彼らは一生をかけた仕事に対して、最終的な備えをしているのです。月並な人間になろうとしているではありません。一人一人が主に認められ、高く評価される特別な人にならなければなりません。私は現在伝道中の人々だけでなく、これから伝道に出るすべての人々について言っているのです。

彼らは今、あたかも多くの砂利や材木を用いて築くようにして、自分自身の人生を築いているのです。もし私たちが自分の生涯を今見通すことができ、これから20年間の生活を目の前に見ることができるとしたら、それぞれある時期を思い返してこのように言うことでしょう。「私が人生に決断を下したのは、宣教師として働いていた時です」と。

皆さんは、主が彼らを伝道に召されるのは福音を宣べ伝えさせるためだけとお思いでしょうか。決してそれだけではありません。それはもちろん大切なことです。しかし、主は彼らを神の息子、娘として将来力強い指導者とするためにも、伝道に召されるのです。

主の偉大な予言者のひとり、かつて宣教師たちに向かってこのように言いました。「皆さんは今、宣教師の召しを解任されようとしています。皆さんは2年間立派に働いてこられました。しかし、皆さんは一生をかけて行なう伝道の使命から解放されるわけではありません。その責任には決して解任ということがないのです。これから先の

生涯ずっと伝道を続けなければなりません。皆さんは今後、さらに多くの今までとは違った責任を受けることでしょう。」

皆さんが伝道の召しを受けるのは19歳です。かりに79歳まで生きるとしましょう。この60年間に、皆さんは人々によい影響力をどれほど強く与えていくことができるでしょうか。皆さんはそれをしなければならぬのです。これは重大な仕事です。私たちはただ単に人々に伝道に出るように勤めているわけではありません。これは皆さんの仕事なのです。天の神が予言者を通じて、皆さんをこの業に召しておられるのです。福音を知りバプテスマを受けたすべての男性、女性、子供たちに責任があります。

昔、エルサレムでもとされたろうそくの明かりが、いつか消されはしないかと気づかう必要はまったくありません。それは前にも増して明るく光り輝くことでしょう。これは主のみ業です。私たちは主の用向きを持てる者なのです。主が私たちに下された戒めははっきりとしています。にもかかわらず、私たちはいまだ世の多くの人々の中であって知られざる存在です。今や私たちは腰を引きからげ、この偉大な業に献身する新たな決意をもって進み行かなければなりません。皆さんも私も皆、そうすることを約束したはずです。私たちは皆、神殿の中で教師たちのまん中に座っていたあの少年が、心配して捜しにきた両親に向かって語られたように、「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」(ルカ2:49)と言えるようでありたいものです。



小さなお友だちへ

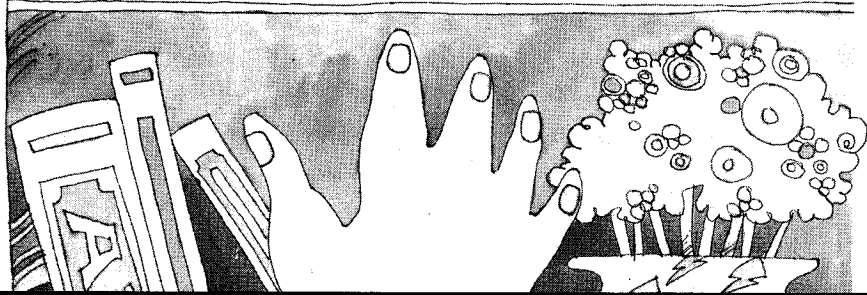
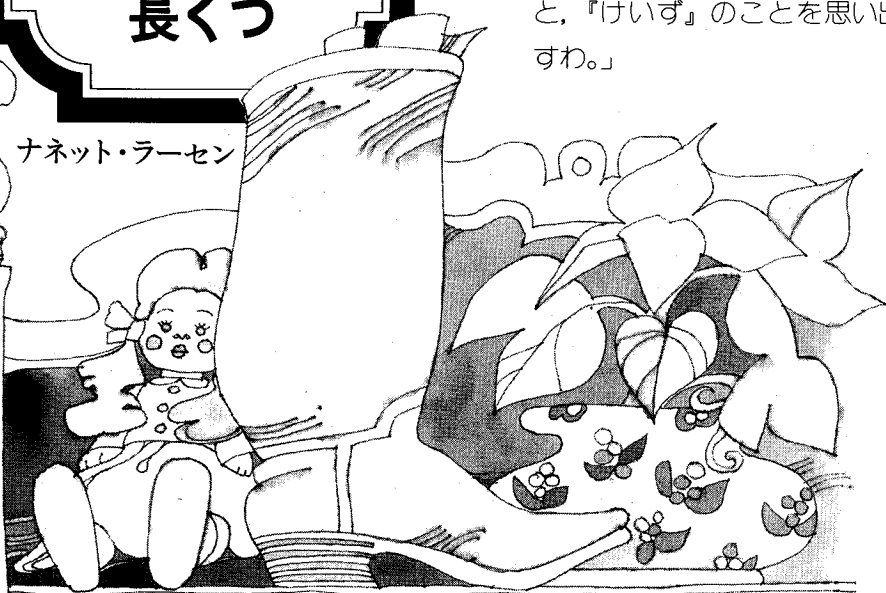


ひいおじい ちゃんの 長ぐつ

ナネット・ラーセン

ペギーは、本だなの上ののっている、ひいおじいちゃんの長ぐつを、じっと見ていました。

お母さんは、よくこういいました。「ひいおじいちゃんの長ぐつを見ると、『けいず』のことを思い出すわ。」



ある日のこと、ペギーはきゆうに長ぐつのが気になって、よく見てみようと思いました。本だなのわきの、いすの上ののって、せのびをすると、長ぐつに手がとどきました。そして、力まかせにひつばると、長ぐつは、音を立てて、ゆかにおちて

きました。

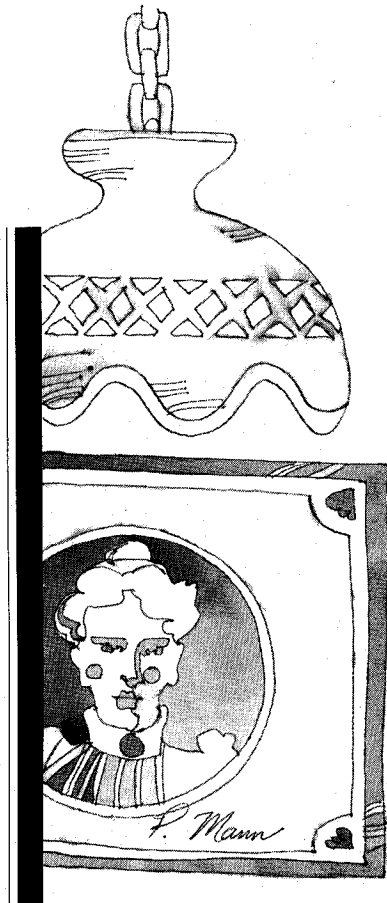
ペギーは、いすからとびおりて、長ぐつをひろい上げました。長ぐつのそこには、大きなあなが、ふたつあいていました。ひいおじいちゃんは、きつと長いこと歩いたんだ、とペギーは思いました。

長ぐつはとても大きくて、ペギーの足なら、2本とも入ってしまいそうでした。ためしに、かた足つつこんでみると、カサコソという音がしました。長ぐつの中には、何まいかの紙が入っていたのです。どの紙にも、お田さんの字で、何か書いてありました。

「お田さん、何を書いていたのかしら。それに、どうして、ひいおじいちゃんの長ぐつの中になんか入れたのかしら。」ペギーは、しわくちやになった紙を見ながら、ひとりごとをいいました。

お田さんの足音が、きこえました。ペギーは、お田さんに見つかったらどうしようと思って、長ぐつをもつて、じぶんのへやにかけこみ、ベッドの下にかくしました。

その日はずっと、お田さんから長ぐつのことを聞かれはしないと、ひやひやしなごらすごしました。夕



しょくのときのことで。ペギーが口の中いっぱいジャガイモをつめこんで、もくもくさせていると、お田さんは、みんなを見まわしていました。

「だれか、ひいおじいちゃんの長ぐつを知らないかしら。」

ペギーは、口の中のジャガイモをぐつとのみこんで、おさらに目をあおりました。

「わたしが、もっているの。」

「あなたが？」お田さんはおどろいて、いいました。

「そう、見つからないように、ベッドの下にかくしたの。」そういうが早いカ、ペギーはじぶんのへやへ行って、長ぐつをもってきました。大つぶのなみだが、ほほをつたってながれました。「ごめんなさい。お田さんが書いたものを、しわくちゃにしちゃって。」

「いいのよ、ペギー。」お田さんはやさしくそういって、だきしめてくれました。そして、長ぐつをもとにもどしました。

つぎの「かていの夕べ」のとき、お田さんはみんなに、きれいな紙につつんだプレゼントをわたしました。そして、ひいおじいちゃんの長ぐつ

をもってきて、みんなに見えるように、ゆかのまん中におきました。

「さあ、プレゼントをあけてもいいわよ。」お田さんはいいました。

ペギーと、テビッドと、ジミーがつつみ紙をやぶくと、ほそ長い、うすい本が出てきました。

「お田さんがもってるみたいなの、『おほえのふみ』だ。」ペギーは大声でいいました。

お田さんは、ペギーの「おほえのふみ」のひょう紙をひらいて、古いしゃしんにうつっている、ハンサムな男の人を、ゆびさしました。「これは、ひいおじいちゃんが、けつこんする前のしゃしんなのよ。お田さんは、小さいころ、ひいおじいちゃんのにつきを読むのが大すきだったの。とくに、長ぐつのことを書いてあるところがすきだったわ。ひいおばあちゃんがなくなったあと、ひいおじいちゃんは、いつしようにけんめいはたらいて、ひとりで5人の子どもたちをそだてたの。あるあつい日のこと、ひいおじいちゃんは、少しのあいだ、小川のほとりにすわって、つかれた足をつめたい水の中につけていたの。ところが、かた方の長ぐつをうつかり水の中におとしてしま

ったの。水のながれはとてもはやくて、どうしても、ひろうことができなかったのね。それで、ひいおじいちゃんは、かた足をはだして、家にかえらなくちゃならなかったの。そのときのことが、につきに書いてあったの。『足がひどくいたくて、おかをのほるのがやつとだった。長ぐつがかた方しかないのは、ちょうどおやのいないかぞくのようなものだ。長ぐつはもどってくるかどうかわからないが、つまとは、いつかもういちど会えるとしんじている』つて。

お田さんはね、ひいおじいちゃんの長ぐつを見るたびに、このことを思い出して、ひいおばあちゃんがなくなって、どんなに大へんだっただろうって、思うのよ。ひいおじいちゃんは、ふくいんを知らなかったから、『しんでんけつこん』のめぐみもいただいていたしね。」

ペギーは、びっくりしてたずねました。「ひいおじいちゃんのかぞくは、えいえんのかぞくではなかったわけ？」

「今は、みんな、しんでんのぎしきがおわっているから、えいえんのかぞくよ。でも、そのときは、そうじゃなかったの。だから、お田さん

は、ひいおじいちゃんの長ぐつを見るたびに、『けいず』のことを思い出すのよ。この長ぐつにはね、書いておきたいなと思うことがあると、そのたびに書いて、入れておくの。」

ペギーは、うれしくなっていていきました。「今から、わたしもじぶんの『おほえのふみ』を書きはじめてもいいのね。」

「ほくもやりたいなあ。」テビッドもいきました。

まだ小さいジミーも、なかまはずれになりたくないらしく、紙とクレヨンをもって来て、すなばであそんでいるえをかきました。

それからは、ひいおじいちゃんの長ぐつは、本だなのいちばん下におくことになりました。そこなら、ペギーと、テビッドと、ジミーにもすぐに手がとどいて、『おほえのふみ』に入れたいことを書いた紙を、いつでも入れることができるからです。

もう、ペギーも、ひいおじいちゃんの長ぐつを、ふしぎに思ったりはしません。それに、すりきれた、ちゃ色の、ひいおじいちゃんの長ぐつは、とつてもすてきに見えました。





あ たたかい春の日です。しゃくとり虫は、はっぱのおひるごはんを、モリモリたべています。そこへ、コマドリがとんできて、えだにとまりました。コマドリも、おなががすいています。コマドリは、やわらかい、みどり色をしたしゃくとり虫が、大こうぶつです。でも、しゃくとり虫は、コマドリのおひるごはんになんか、なりたくありませんから、木のえだから、とびおりました。それでも、けがはしません。クモのようにほそい糸を出して、ぶら下がるの

しゃくとり虫 むし

ポーラ・デポロ



コマドリは、空中にぶら下がっているしゃくとり虫を、見えています。みどりのもいれば、赤つばいのもいます。ちゃ色のも、き色のもいます。しまもようのもいるし、つのがはえたのもいます。毛虫や、いも虫も、しゃくとり虫のなかまでです。しゃくとり虫という名前がついたのは、歩きかたのせいです。毛虫や、いも虫

は、しゃくとり虫のような歩きかたはしません。

しゃくとり虫は、まず前足にうしろ足をつけ、次に前足をのばし、また前足にうしろ足をつけるというように、歩きます。しゃくとり虫のからだのまん中あたりには、足がないのです。

風がふいてくれば、糸でぶら下がって、前へも、うしろへも行けます。

しばらくすると、コマドリは、サーッと、とんで行ってしまいました。さあ、おひるごはんの、たべなおしです。

と、とつぜん、あたりがぐらくなりました。男の子が来て、しゃくとり虫を、つまみあげたのです。しゃくとり虫は、男の子の手の上を歩いて、ゆび先まで来ると、うしろ足で立って、あたりをキョロキョロ見まわしました。男の子は、大きな声でわらいました。「おもしろい歩きかただなあ。ほくのうでの長さを、はかっているみたいだ。ほくのうでは、長いんだよ。でも、きみは、たったの3センチ。」

しゃくとり虫は、男の子のかたで、ひとやすみしました。男の子は、いました。「お父さんが、いったよ。

きみは、夏になると、土の中にもぐって、まゆを作るんだって。そして、冬のあいだは、ずっと土の中にいて、つぎの年の春には、もう、しゃくとり虫じゃあ、なくなるんだ。白か、はい色か、ちゃ色のガになるんだよ。きみ、知っていたか。もし、メスのガだったら、秋になると、何百コものタマゴを生むんだ。タマゴは、さむい冬のあいだ、木のかわについていて、春になると、しゃくとり虫になるんだよ。あつ、ほく、もう行かなくちゃ、しゃくとり虫くん。来年の春は、ガになって、ほくの家にとんできてくれるかもしれないね。」

男の子は、しゃくとり虫を、やさしく木のえだにかえしてやりました。しゃくとり虫は、どんどん歩いて行きました。

とつても、とつても、おなががすいています。冬を生きぬくために、モリモリ、モリモリ、たべなくてはならないのです。大きな、みどりはつばの上にのぼって行って、しゃくとり虫は、はつばのかげに、見えなくなってしまうました。もう、コマドリが来たって、見つかりっこありません。さあ、また、おひるごはんです。



ミック・リーサー



なにが かかれてあるかな？



—音楽活動の輪を 広めるために—

全国LDS音楽祭

「愛の歌を広めよう」のテーマの下に、伝道80周年を記念して大阪北ステークス部主催「第1回全国LDS音楽祭」が、去る10月10日、大阪北ステークス部センターで開催された。

高崎ステークス部からの50名を筆頭に、横浜ステークス部、高松ステークス部などからの参加者を含め約600名の人々が集い、歌や演奏を楽しん

だ。プログラムは家族部門（家族による発表）・器楽・ポピュラー・コーラスの4つの部門に分けられ、ポピュラーとコーラスの部門ではコンテスト形式で審査が行なわれ、横浜ステークス部と神戸ステークス部がそれぞれ優秀賞を受賞した。

日頃ステークス部間の交流が少ない中で、音楽活動を通じて友情の輪を広め、交流を図れたのは大きな成果であろう。

2回目の大会は今年9月15日を予定しているが、今回、運営に当たった大阪ステークス部の音楽担当高等評議員である赤間洋兄弟は、「次回にはさらに多くのユニットから出場者を募り、より愛の歌を広められたら」と期待をふくらませている。

自立の大切さ
を認識させた

全国LDSろうあ者大会

過日、全国LDSろうあ者大会が、青森（八戸支部）からの3家族を初め、ろうあ者60名、その他ボランティアの兄弟姉妹200余名の参加を得て行なわれた。これは、横浜ステークス部の主催により、国際障害者年と伝道80周年を記念して開かれたものである。

初日の11月21日（土）、参加者は東京神殿に参入し、手話通訳の助けを得てエンゲウメントや死者の身代わりのバプテスマを受けた。その夜は、横浜ワード部で上演された劇団未来による

手話劇『クリスマスキャロル』を楽しんだ。

翌22日、参加者は横浜ステークス部大会に出席し、人々の歓迎を受けた後、ろうあ者とボランティアのクラスに分かれてセミナーを受けた。ろうあ者クラスでは、自立の大切さについてのテーマで話し合いが持たれ、一方ボランティアのクラスでは、教会用語の統一のための手話講習が熱心に行なわれた。また夜の特別大会においては、菊地良彦長老から「10万、20万、30万の組織にし、ろうあ者の支部、ワード部を！」



左：証を述べるろうあ者
右：大会参加者



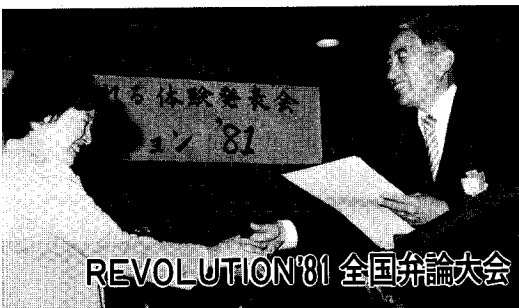
◀左：横浜ステーキ部(15名)の発表
右：岡町ワード部のコーラスの発表

との将来へのビジョンと、ろうあ者への暖かいはげましの言葉があった。

最終日の23日には、扶助協会年次大会に出席し、証会ですべての日程を終了した。

今回の大会を通じて、ろうあ者たちは信仰を深め、不自由さを訴えることから一歩進んで、自立の必要性を自覚できたのが最大の収穫であった。同時に、ボランティア活動の大切さも再認識され、今後の活動が期待される。

なお、横浜ステーキ部の田中靖也兄弟が、地域のろうあ者委員会の事務局長に召され、今後のフォローに当たる。



～若人による力あふれる体験発表～

あなたの旗は、はためていますか

伝道80周年を記念して、11月3日、東京ステーキ部センターで、全国弁論大会が行なわれ、各ステーキ部代表の若人が熱弁を振るった。北は仙台ステーキ部から南は遠く沖縄ステーキ部にいたるまでの20人の代表による体験発表は、常に救い主の旗じるしとなれるように努力することの尊さを教えてくれる力の込められたものであった。

大会審査委員長に田中健治長老、その他7名の審査委員により審査が行なわれ、すべての弁士に優秀賞ならびに技能賞・霊性賞・アンコール賞、感動賞などの各賞が授与された。

その中から特に今月号では、優秀賞・霊性賞を授賞した沖縄ステーキ部与那原支部の池間晴美姉妹(21歳)と優秀賞・アンコール賞を授賞した東京ステーキ部下北沢支部の武田修兄弟

(20歳)の体験を紹介することにしよう。

人生は素晴らしき旅

池間 晴美

「人生は素晴らしき旅」、この言葉を耳にするたびに、私の心の中に3年前の自分の姿が浮かんできます。3年前、私は本当の意味での人生の旅に出立ちました。その頃の私はちょうどあのジョセフ・スミスのようにどの教会が真実であるのか知りたくて悩んでいました。そして、その時ひとつの夢を見ました。夢の中で私は3人の白い衣をまとった御方に会いました。私に向かって、いちばん左側に立っておられた御方が私の前に歩み寄り、このように言いました。「あなたの服では私のところへ来ることはできませんよ。この服に着替えなさい。」そう言って彼は私に白い衣を手渡してくれました。

私は今までに、彼のような穏やかな笑みをたたえている人を見たことがありませんでした。そして、その笑みは今でも私の心の中に生き続けているのです。それから1週間後、新聞を読んでいた時、末日聖徒イエス・キリスト教会の英会話クラスの記事が目にとまりました。そして、その時何かが私の心にさざやきかけました。「あなたの求めている教会はここですよ。」このような導きを受けて私はこの教会の会員になることができました。そして、私がバプテスマの時に着たあの衣装は、夢で彼が私に手渡してくれたものと同じでした。

このように、すんなりとこの教会の会員になることができた私ではありませんが、それからは苦しみは連続でした。今まで何も争い事なかった家族の中に問題が起り、そのたびに教会のせいになされました。一番大好きだった母に「あなたが教会に入ったために家族が不幸になった」と言われた時は、生まれてはじめての大きな悲しみを味わいました。

暗い部屋の中で何時間も祈り続けたこともあります。でも私ができるようにしている時に、神様の愛と助けにより家族の心が次第に和らぎ、

ひとり、ひとりと教会へ導かれていきました。そして今では、母も与那原支部のプライマリーの会長として一生懸命働いていますし、妹も強い信仰を持って頑張っています。

神様の愛と恵みをたくさん受けてはいますが、私は人間の弱さから時々失敗をすることがあります。今年になって、私はとても大きな罪を犯してしまいました。そのことによって自分が神様の前から断ち切られても仕方が無いと思っていました。毎晩、屋上に上り、祈りを捧げました。「天のお父さま、どうぞ私の罪を赦して下さい。そして、これ以上私があなたを悲しませるようなことがあるのなら、いっその私の息の根を止めて下さい。」この祈りは本当に私の心の底からのものでした。私はこれまでに祈りがこれほど苦しいものであることを知りませんでした。

けれどもどのように苦しみのどん底でもかいてある時、私は幸いにもまたひとつの夢を見ることができました。夢の中で私はひとりの人に会いました。彼は、私をある所に連れて行きこう言いました。「私の傍らに立っている天使を見なさい。」私は一生懸命目をこらして見ようとしましたが見る事ができません。彼はもう一度同じことを問いかけてから、こう言いました。「あなたはなぜ人間の目で天使を見ようとするのですか。心の目で、霊の目でなければ天使を見ることはできませんよ。」私はその時はっとしました。今まで自分が霊の目で物事を見ようとしていなかったことに気付いたのです。そうしていると沢山の子供たちが私の前に来て遊び始めました。その中のひとりを見て、私はこう思いました。「ああ、子供の頃のジョセフ・スミスだ。でもなぜ私とどこも変わるところもないような無邪気な子供が予言者として召されたのだろう。」するとひとつの声が聞こえてきます。「私がなぜ彼を選んだのか、あなたに分かりますか。」私は分からないと答えました。彼はもう一度同じ質問をしました。「あなたは、なぜ私が彼を選んだのか分かりますか。」私はいくつかの理由と答えました。すると彼はこう言いました。「私が彼を選んだのは彼が何度苦しい

目に遭い、倒れ、傷ついても自分で立ち上がる強い力を持っていたからです。」

私は夢から覚めて大声で泣きました。その時、神様が何を望んでおられるのかが分かったのです。神様の前から断ち切られていたと思っていた私の傍らで、主は私が自分の足で立ち上がって来るのを待っておられたのです。私の苦しみを御自身の苦しみとし、私の悲しみを御自身の悲しみとして主はじっと待っておられたのです。きっと私よりも主の方が何倍もつまらかったに違いありません。私は、主が私の目の前で両手を広げて「さあ、自分の力で、私のところまで歩いていらいっしょい」と言っているような気がしました。

私は、主が私の手を握ってしてくれる限り、主について行こうと思っています。そして主の愛と忍耐に心から感謝し、その名を賛美します。

私は今でも苦しいことに出遭うたびに心の中でこうつぶやきます。「人生は素晴らしき旅、そして私の旅は今始まったばかりなんだ」と。

一人一人に手紙を書く

武田 修

初めに、私がこのテーマを選んだ理由をお話してみたいと思います。

私の母は、お寺の娘として生まれて以来50年間、仏教の中で生きて来ました。父は、手かぎしの真光教を信仰しています。また兄は、宗教というものに対してあまり良いイメージを持っていないようです。このように違った宗教観を持った家族に、私が受けているこの真実の福音を伝えたいとの思いが強まり、伝道の必要性を強く感じたのが最初です。

次の理由として挙げられるのは、私たち家族4人が現在別々に暮らしているためです。静岡のいなかにいる母と、京都で大学院に通っている兄、そして仕事のため単身で東京に来ている父と、同じ東京で独身寮に入っている私です。私は、その一人一人に毎週手紙を書くことによ



◀ 弁論大会参加者。
前列右から2番目
が池間晴美姉妹、
後列右から4番目
が武田修兄弟

って、家族の絆を少しでも強めることができた
らと思えました。

そして最後に一番大きな理由として、今まで
あまり親孝行らしきことをしていなかったため
です。ほとんど連絡もせずに心配ばかりかけて
きた自分を、これを機会に少しでも変えること
ができたらと思えました。

私は、チャレンジを始めた6月22日から約20週
間にわたって、ずっと手紙を書き続けています。
最初の手紙に今まで自分が家族一人一人から受
けてきた愛に対する素直な感謝の気持ちを書
いたのですが、ひとつとても大きなことに気が
付きました。というのは、生まれてから20年間
というもの、父親に手紙を書いたのはその時が
初めてだったのです。正直言ってすごく照れ臭
く感じましたが、自分が家族に対して、どのよ
うにして愛と関心を持つようになったかを一生
懸命書き綴ってきました。また家族にどのよう
にして福音を伝えれば良いだろうかと考えてい
る時、私は、どんな言葉も、良い模範に劣ると
心に強く感じました。

私は来週の11月9日に初めてのバプテスマ記
念日を迎えます。これまでの1年間に、福音を
通して自分いかに生活を変え、考え方を変え
て、本当にハッピーな毎日を送っているかを手
紙に書いてきました。その片隅に小さく、証を
書くこともできました。

そうこうしているうちに、先日母からの電話
で、父とふたりで北海道へ旅行するとの知らせ
を受けました。今まで、私か心配ばかりかけて
いたために旅行もできなかった両親が、ハネム
ーン以来の大きな旅行をすると聞いて、私は本
当にうれしく思いました。さっそく両親のため
の携帯用カメラを持って、出発前の土曜日に
静岡のいなかに帰りました。しかし土曜の夜の

授業のためにまたすぐ東京に戻らなければなり
ませんでした。母はそれを知ってすぐに食事の
仕度をしてくれ、温かく迎えてくれました。一
緒にいたのは、わずか1時間半足らずでしたが、
楽しく語り合うことができ、またカメラと一緒
に手渡した本「回復された真理」を母がとても
喜んで受け取ってくれた時には、「ありがとう」
の感謝の言葉が自然に口をついて出て来て、胸
に熱いものを感じたのでした。

両親が北海道旅行をしている約10日間、家族
のことを、また両親と家族の無事を強く祈りま
した。そのことを書いた手紙を、両親が帰って
来る日に合わせて出しました。その夜、帰って
来た母から電話があり、手紙を読んだらしく、
「祈ってくれてありがとう。お陰で良い旅行が
できたよ」と言ってくれたのです。

私は、このレポリューション'81のチャレンジ
を通して、感謝の言葉を照れずに心から言え
るようになり、行ないをもって愛と関心を示す
ことができるようになりました。生活すべての中
で、家族を第一に考えることができるようにな
り、「修は、変わったね」と言われるようになった
のです。

2週間前のワード部での発表の場をひとつの
くぎりとして、新しくモルモン経を1章ずつ書
いて家族に送る決心をしました。そしてけき、第
Iニーファイの第2章を送ることができました。

最後に、まだ自分が教会員となったことを家
族に話していない方、またなかなか伝えること
ができない方に申し上げたいと思います。家族
を後回しにしないで下さい。決して恐れること
も恥ずかしがることもないはずです。自分が福
音を通して本当に変わるならば、それを一番敏
感に感じるのは両親であり家族であるから、

御静聴ありがとうございます。

▶ 補訂正 ◀ 1981年10月号p.27の年表で、日本西部北海道部の分割が
1978年とあるのは、1976年の誤りです。おわびして訂正いたします。

